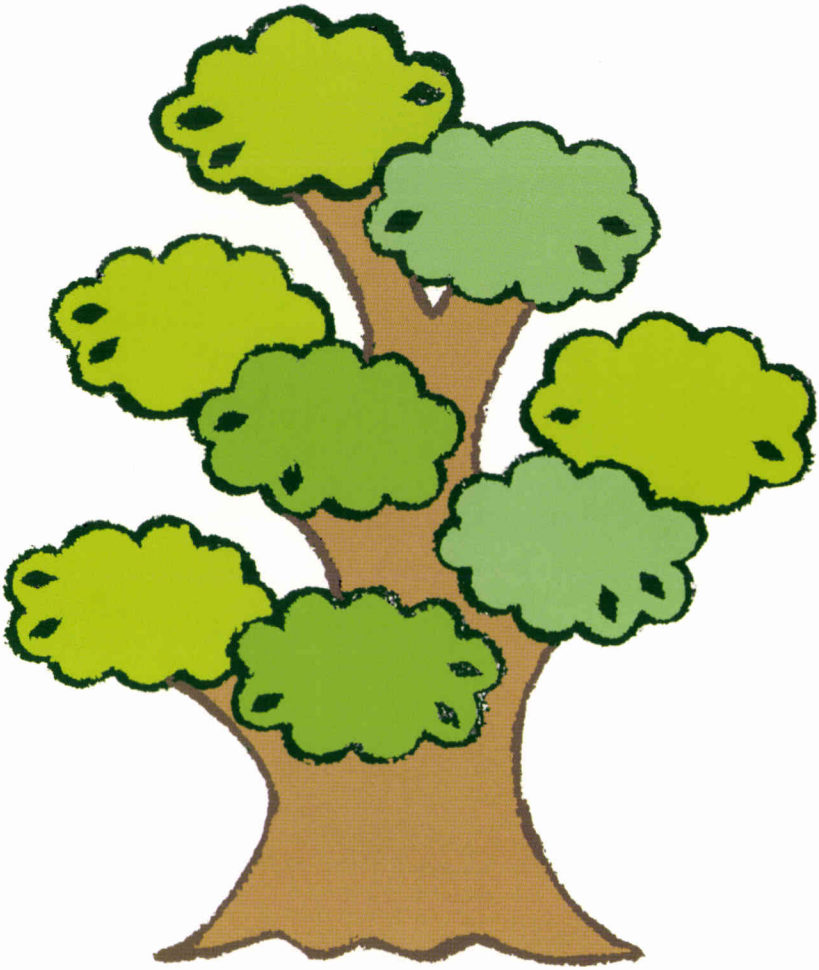
神の民
LAOS講座　第4号

神と人間

ー 聖書は救いのドラマ ー



日本福音ルーテル教会

神の民
LAOSの樹

⑧「世界」の中のキリスト者
家庭と職業への召命
キリスト者と生命倫理
キリスト者と社会問題
人権・正義・平和・環境保全
情報化/グローバル化

⑦宣教と奉仕の理論と実際
教会は「宣教共同体」
神の民・「信徒と教職」
宣教と奉仕の具体像
牧会的カウンセリング
教会のディアコニア

⑥信仰継承
旧約聖書に見る信仰継承
小児洗礼と親・教保・教会の役割
堅信教育モデル
教育カリキュラム
祖先と死者の記念

⑤教会の歴史
初代教会の歴史
宗教改革の展開
現代教会の流れ
ＪＥＬＣの歴史
自分の教会の歩み

③教理問答・諸信条
小教理問答書の展開
アウグスブルク信仰告白
ニケア信条と教会再一致
義認の教理とルーテル教会
日本の社会・文化の中で
信仰を告白すること

②説教の聴き方・語り方
聖書日課（ペリコペー）の意味
説教の主題発見
説教の構成と表現
霊的な奉仕への召命
説教の展開としての牧会

④「聖書」とその読み方
「聖書」の読み方
救いの歴史の道筋
聖書の各書を読む
聖書とその周辺
「私」の聖書ノート

①礼拝の意味と実践
教会は「礼拝共同体」
教会の暦と礼拝
礼拝と音楽・会堂建築
式文の構成と会衆の参加
公同礼拝の司式者の役割

祈り・聖書

宣教共同体
家庭と社会
礼拝共同体

もくじ

★ LAOS 講座へのお招き …… 4
Ⅰ．聖書とは何か
　1．学びのはじめに…… 6
　2．聖書とは
　　1）「本の中の本」…… 6
　　2）私たちの正典…… 7
　　3）正典とは何か…… 7
　　4）聖書の解釈…… 8
　　5）聖書のみ…… 8
　3．聖書は神の救いのドラマ
　　1）救いのドラマ…… 9
　　2）聖書を読むことはキリスト・福音と出会うこと……10
Ⅱ．救いの歴史のドラマ（旧約）〈メシヤ到来まで〉
　―旧約聖書とイスラエルの歴史に示された救いのドラマ―
　1．旧約聖書とは何か……12
　　1）旧約聖書の構成とイスラエルの歴史の区別……12
　　2）イスラエルの歴史区分と諸文書の成立……14
　　3）モーセ５書……14
　　4）文書資料説とは何か……16
　　5）祭司資料……16
　2．歴史……18
　　1）出エジプトと十戒・モーセ……18
　　2）イスラエル民族の基礎
　　(1)カナン定着とヨシュア（前1250年頃）……22
　　(2)士師たち……22
　　3）統一王国時代
　　(1)サウル　前1020年～1000年……24
　　(2)ダビデ　前1000年～961年 ……24
　　(3)ソロモン　前961年～922年……25
　　4）王国分裂時代と滅亡

(1)北イスラエル王国の200年間　前922年～722/1年 ……26
(2)南ユダ王国の335年間　前922年～587年 ……27
(3)滅び行く2つの王国 ……27
5）バビロン捕囚時代　前587～538年……29
6）解放・帰還・再建
エズラ記・ネヘミヤ記……30
3．預言者を通して語られた救いのドラマ……31
1）預言者とは誰か……31
2）アモスは何を語ったか……32
3）ホセアは何を語ったか……33
4）イザヤは何を語ったか……34
5）エレミヤは何を語ったか……36
6）エゼキエルは何を語ったか……38
7）第二イザヤ「神の僕、慰めの預言者」……39
4．信仰による文学……42
1）哀歌・雅歌・コヘレトの言葉……43
2）ルツ記・ヨナ書……44
3）ダニエル書……44
4）詩編とヨブ記……44
5．まとめ……46
III．救いの歴史のドラマ（新約）〈メシヤの到来とそれから〉
1．旧約聖書からイエスへ
1）メシヤ待望……48
2）メシヤの出現・キリスト誕生……49
3）イエスと新約聖書……50
4）新約聖書……51
5）福音書……52
6）共観福音書と第四福音書とその資料……53
2．救いの到来
1）神の国の担い手……54
2）イエスの死の意味・キリストの死……56
3）十字架と復活・救いのドラマのクライマックス……57
4）福音書と使徒言行録　復活と弟子たち・第二の召命……57

３．教会の誕生と展開
１）昇天　新しい出発……59
２）聖霊の降臨と教会の出発……60
３）宣教の展開・復活のイエスとパウロ……61
４．終末の希望と救いの完成・黙示録……63

LAOS 講座へのお招き

信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。―これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会（JELC）は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」（パワーミッション21、略称 PM21）を2002年５月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」（ガラテヤ4:19）、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」（フィリピ3:12）。

LAOS（ラオス）として

PM21の第二プロジェクト（P２）の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS講座」と名づけました。LAOS（ラオス）、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」（ラオス・セウー）という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOSという言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

教会の輪の中で

「LAOS講座」の第一期の学びは別掲の「LAOSの樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2005年３月

日本福音ルーテル教会宣教方策21（PM21）
プロジェクト２（P２）委員会

（本書の目的）

LAOS講座第4号は、聖書を神の「救いのドラマ」という視点でとらえ、それを再確認することを目的にしています。

Ⅰ．聖書とは何か

1．学びのはじめに

教会の信仰は、聖書を規範として成り立っています。私たちが信仰を考え、教会を考え、宣教を考えるということは、すべて聖書を規範としてなされることになります。私たちの在りよう、思索、行動の全ては聖書を規範としているのです。これが私たちの出発点であり、同時に終着点であることを、私たちは先ずわきまえておかなければなりません。

2．聖書とは

1）「本の中の本」

聖書のことを英語では〈ザ・バイブル（the Bible)〉と言いますが、この語源は、ギリシア語のビブリオンという語です。この語は元来、ただの〈本〉という意味でした。このただの〈本〉という語が〈聖書〉を意味するようになったのは興味深いことです。よく言われることですが、詩歌の世界で花と言えば日本では桜を指すように、聖書は〈本の中の本〉と言えるのです。ルターが、聖書を人々の書物とするためにドイツ語に訳して、誰にでも読めるようにしたことは有名ですが、彼は『聖パウロのローマの信徒への手紙序文』に、次のようなことを記しています。「本書はキリスト者が一言一句を暗記するどころではなく、魂の日毎の糧として、日常これに親しむに足りるだけの品位と価値とを備えている。だからこれをあまりに多く、あまりによく読み過ぎるとか考え過ぎると

かいうことはほとんどありえない。これに親しめば親しむほど、ますます尊く、よりよく味わえるような書物である。」聖書は尽きることのない深い意味を持った書物であり、まさに唯一の書であると言うことができます。

2）私たちの正典　プロテスタント教会では、聖書を唯一の拠り所とし、その教義と信仰生活の基準としてきました。聖書は、教会の拠るべき唯一の正典です。

JELC憲法第2条

3）正典とは何か　正典とは、ギリシア語の「カノン」の訳であり、これは元来、葦の〈茎〉であり、〈ものさし〉〈基準〉〈規範〉を意味しました。カトリックでは、聖書と共に、旧約聖書続編も正典と認め、また教会における聖伝（伝統）を重んじ、この2つは同じように大切であるとしていますが、プロテスタントは、「聖書のみ」を重んじてきました。カトリックでは、聖書を尊重するのですが、多くの宗教文書を結集し選択したのは教会ですから、その教会の聖伝伝統は聖書と並んで重んじられるべきだと考えます。

これに対して私たちプロテスタントは、聖書を現在の形に決めていったのは教会であっても、正典化は教会の業ではなく、既に聖書自身の固有な性質による結集力と権威を教会が認定したに過ぎないのであって、正典としての力は聖書自身が持っているのであると考えます。

聖書は、教会の伝統や教義を生み出し決定するための基準であり、神の言葉なのですから、伝統と同じ位置において考えるのは正しくないのです。私たちは、聖書が教会の規範であると

考えなければなりません。

4）聖書の解釈　私たちは、聖書をいろいろな所で読みます。いつ、どこで、どのように読まれるにしても、大切なのは、聖書は教会という脈絡の中で読まれるということです。

神が特定の時と所と表現様式をもって、語っておられることを神の意図に即して理解することが必要です。ですから、そのためには、どうしても解釈することが求められます。そこでは、学問の助けを借りることが役に立ちます。

聖書は、歴史の中で書かれた文書です。ですから私たちは、文献的・歴史的に研究を徹底して、先ず聖書が書かれたときの状況を明らかにし、そのとき神が語りかけ告知した意味を明らかにしなければなりません。そして、その基礎に立って、今日この場所に生きる私たちに語りかけている言葉を解釈するのです。

私たちは、聖書が語っているイエス・キリストの福音を聴かねばなりません。ですから、宗教改革者たちが「聖書解釈者は聖書自身である」と言った言葉の深い意味を、心に留めておかなければなりません。このような聖書の解釈は、具体的には、教会生活の基盤に立ってなされます。聖霊の働く場である教会の生活を通して、私たちは正しく聖書を読むことができるのです。

5）聖書のみ　プロテスタントが、聖書を唯一の拠り所とすることは既に述べましたが、その主張は、ルターの宗教改革によるものです。カトリックの〈聖書と伝統〉に対して、プロテスタントが〈聖書のみ〉を主張することも述べま

した。

しかしこのことは、私たちが何か一つのお題目として〈聖書のみ〉を唱えているということではありません。それは意味の無いことです。

例えば、新約が書かれたのは、主イエスの教えが立派だから文書にしておこうというのではなく、襲い来る迫害の中で弟子たちがそれに耐えて、彼らの信仰を守り抜くために、主イエスの言葉と業とを読み、また手紙を読んで力づけられたのだという現実があったからです。

ヴォルムスの国会で、当時の権威者に対して、自説を取り消すように脅かされたルターが、「み言葉に照らして私の誤りが指摘されなければ一語たりとも取り消すことはできない。私はここに立つ。主よ助けたまえ。」と力強く叫んだように、聖書は生ける力として私たちに働くものです。

3．聖書は神の救いのドラマ

1）救いのドラマ

聖書は言うまでもなく、旧約と新約から成っており、古代イスラエルと原始キリスト教の宗教的諸文書の集められたものであるということができます。それらは、長い年月の隔たりがあり、多くの人によって書かれたので、言語も文体も用語も異なっています。またそれらは、いずれも初めから聖書に組み入れられることを意図して書かれた文書ではなく、後に集められ、選ばれて聖書とされたのです。

聖書は、いろいろな読み方ができます。歴史書として、文学書として、また人間の生き方を扱った道徳書として読む人もいるでしょう。しかしそれだけではありません。「聖書はすべて

神の霊感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しく義に導くのに有益である」とあるように、聖書は、根本的には神の霊によっています。しかしこのことは、聖書の一字一句を無批判に機械的に信じ込むというのとも違います。聖書は、いろいろな時代に多くの人によって書かれながら、その中には一貫した大きな目的を持っています。その目的とは、人間を救う神の計画が、あらゆる時代を通じて、人々の日常生活の中でどのように実現されたかを示そうとするものです。神の救いのドラマがそこにあるのです。66巻から成る聖書を貫き通しているその生命が神の霊、聖霊です。

IIテモテ3:16（口語訳）

聖書は人間の手によって書かれたものですから、私たちは、他の書物と同様、聖書を批判的、科学的に分析し研究しなければなりません。しかし私たちは、聖書を読むとき、神の力の働きを受け、神の言葉として読むことが何よりも大切なことです。「文字は人を殺し霊は人を生かす」とあるように、聖書を単に文字として読むのではなく、そこに流れている生命に触れて、生命の言葉として読むことが大切なのです。

IIコリ3:6（口語訳）

2）聖書を読むことはキリスト・福音と出会うこと　聖書はイエス・キリストを証しするもので、旧約と新約を結んでいるのはイエス・キリストです。つまり、聖書を読むことは、このイエス・キリストに出会うということです。聖書を読むときに大切なのは、それを通して私たち自身が、この世界の中でキリストに直面するということであり、その言葉を語られた主ご自身に出会うということです。聖書によって、神の

福音に心を開き、イエス・キリストの存在に触れるとき、聖書は真実に聖なる書物になるのです。

ヨハネ5:39

ルターは、「聖書はその中にキリストが横たわっている飼葉桶である」と述べています。つまり、今まで述べてきたことを一言でまとめると、聖書は福音として読むということです。

聖書は、人間に対する神の赦しの福音を告げています。私たちは、聖書の中からこの福音を聴くものでなくてはなりません。祈りながら、謙虚に、忍耐強く読むのです。

ローマ1:17（口語訳）

「信仰によって義人は生きる」という言葉に神の福音を受け取ったルターのように、私たちは福音として、イエス・キリストを中心に聖書を読まなければなりません。そして、そのような読み方をするところが教会なのです。教会は聖書をキリストを中心に聖霊によって解釈するところであり、これなしには、教会は生命を失うことになります。

私たちは、ルターが、「聖書の中には、ただ読むために言葉があるのではない。まことに生ける言葉がある。その目的は、生命を得させ、実際に行わせるためである」と言っている言葉を受け止めたいと思います。

Ⅱ．救いの歴史のドラマ（旧約）〈メシヤ到来まで〉
―旧約聖書とイスラエルの歴史に示された救いのドラマ―

Ⅰで学んだことを踏まえて、次に聖書に証しされた救いの歴史の筋道・各書を、はじめに旧約、次に新約と読んでいくことにしましょう。

1．旧約聖書とは何か

旧約聖書は、主イエスが生まれるまでのイスラエルのおよそ2千年にわたる彼らの歴史にまつわる諸文書の結集であると言えます。39の文書、更に言えば、それらの諸文書は、B.C.（紀元前）950年頃からB.C.160年頃の800年間に書かれたもので、言語は西方アラム語に属するヘブライ語です。旧約聖書は、イスラエルの歴史に関する彼らの神学であると言うことができます。

つまり、彼らが信仰によって見た神のこの世界に対する関わりの記録なのです。そして、その記録は現在も意味を持ち続け、今日もなお、現代に生きる私たちと世界にメッセージを発し続けているのです。

1）旧約聖書の構成とイスラエルの歴史の区別

旧約聖書
- 律法（モーセ五書）
- 歴史
- 預言者たち
- 文学

以下、ここでは、旧約聖書を大きく4つに分けて、更にイスラエルの歴史を大きく6つに分けてそれを柱にし、その過程で成立していった各書の内容や神学に触れながら、旧約聖書全体の理解を深めていきたいと思います。

先ず旧約聖書を4つに分けてみましょう。

①**律法**＝創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記

②**歴史**＝ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエ

三大預言書
イザヤ、エレミヤ、
エゼキエル
十二小預言書
ホセア、ヨエル、アモス、
オバデヤ、ヨナ、ミカ、
ナホム、ハバクク、
ゼファニヤ、ハガイ、
ゼカリヤ、マラキ

ル記上下、列王記上下、歴代誌上下、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記

③**預言者たち**＝イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼファニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

④**文学**＝ヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌

イスラエル民族の形成
↓ アブラハム、イザヤ、ヤコブ、ヨセフ
出エジプト
↓ モーセ、ヨシュア
士師たち
統一王国
↓ サウル
ダビデ
ソロモン
分裂王国
↓ 北イスラエル王国の滅亡
南ユダ王国の滅亡
エルサレムの陥落
預言者たち
バビロン捕囚
↓ 解放・エルサレム帰還
神殿再建
↓
中間時代

次に、イスラエルの歴史の重要なポイントを大まかに６つの時代に分けてみましょう。

①紀元前2000（？）～1300頃　前史（イスラエルの始まりと族長たちの時代）

②紀元前1300頃～1020　イスラエル民族の出エジプトとカナン定着、士師時代

③紀元前1020～922　王国の成立と繁栄の時代（統一王国の時代）

サウル　紀元前1020～1000
ダビデ　紀元前1000～961
ソロモン紀元前961～922

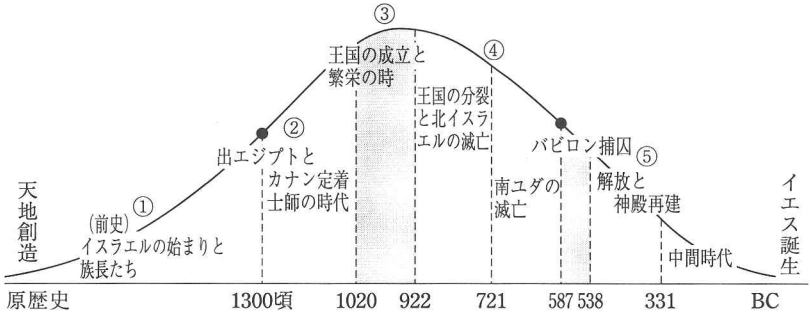
④紀元前922～721　王国の分裂と北イスラエル王国の滅亡
紀元前721～587　単立王国時代
紀元前587～538　バビロニア捕囚時代

⑤紀元前538～331　捕囚後の時代
紀元前516　解放と神殿再建

⑥紀元前331～　中間時代
ギリシア時代　紀元前331～63
ローマ時代　紀元前63～

＊イエス誕生（紀元前4？　6？　7？）

2）イスラエルの歴史区分と諸文書の成立



さて、先に区分した旧約聖書の各書は、この歴史のどこでどのように成立していったのでしょうか（本文では、紙面の都合でそのすべてにふれることはできませんので、全体像は巻末の表に記しておきます）。聖書の各書は、目次通りの順番で成立したのではありません。初めに述べたように、旧約聖書の各書は、歴史の過程の中で、その時代を背景にして成立していったのです。例えば、創世記は歴史的にはいつどのように成立したのでしょうか。実は、聖書の最初の言葉、創世記の１：１の「初めに、神は天と地を創造された」という言葉は祭司資料（Ｐ資料）というものによっています。祭司資料、いったいこれは何のことなのでしょうか。それを知るために「モーセ５書」についてお話ししなければなりません。

〈旧約聖書（39巻）〉

１．五　書　モーセによって書かれたと伝えられましたが、むしろモーセを中心とする一連の書といえます。「律法」ともよばれていますが、創世記や族長の物語、イスラエルの古い歴史を含んでいて、単なる律法集ではありません。それらの物語を通して、神のみ前に歩む道が示されています。

３）モーセ５書　さて、旧約聖書の最初に置かれた創世記から申命記までの５つの書物は「モーセ５書」ペンタテユークと呼ばれます。ペンタは５、テュークは巻物という意味です。つまり、「五つの巻物」という意味です。ユダヤ教では、このモーセ５書をトーラー「律法」と呼

律法／モーセ五書
- 創世記
- 出エジプト記
- レビ記
- 民数記
- 申命記

		原歴史	天地創造			
			堕罪			創世記
			大洪水,バベルの塔			
		族長時代		アブラハムの召命		
				イサク		
				エサウとヤコブ		
				ヨセフ		
1300	BC					出エジプト記
		イスラエルの出エジプト(1300頃)				レビ記、民数記
1200						申命記
		カナン定着(1250-1200頃)				ヨシュア記
1100		士師時代(1200-1020頃)				
						士師記、ルツ記
1000			サウル	・サムエル		
		統一王国時代(1020-922)	ダビデ			サムエル記 Ⅰ, Ⅱ(王国の成立、ダビデ、ソロモン)
900			ソロモン		三大預言書	列王記 Ⅰ, Ⅱ(王国の歴史、バビロン捕囚まで)
				・エリヤ	イザヤ書	
800				・エリシャ	エレミヤ書	歴代誌 Ⅰ, Ⅱ(アダムからダビデ、ソロモン、ユダ王国の歴史)
		分裂王国時代(922-587)		・アモス、ホセア、ミカ	エゼキエル書	
700		北イスラエル王国の滅亡(722/1)		・イザヤ	哀歌、ダニエル書	
		南ユダ王国の滅亡(587)		・エレミヤ	十二小預言書	
600			ヨシュア宗教改革		ホセア書、ヨエル書、アモス書	
		バビロン捕囚時代(587-538)	キュロス勅令	・エゼキエル、第二イザヤ	オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書	
500		帰還	第二神殿完成		ナホム書、ハバクク書、ゼファニア書	
				・エズラ	ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書	エズラ記(捕囚からの帰国と神殿再建)
400				・ネヘミヤ	信仰による文学	ネヘミヤ記(信仰復興)
		プトレマイオス朝エジプトの支配下に			ヨブ記、詩篇、箴言	エステル記(ペルシャ時代のユダヤ人)
300					コヘレトの言葉、雅歌	
		パレスチナ各地でヘレニズム化			(哀歌、ルツ記、ヨナ書、ダニエル書)	
200						
		セレウコス朝シリアの支配下に				
100		マカベヤ戦争、ハスモン王朝成立				
		ローマの属州シリアに編入				

びます。この５書の研究は、長い変遷を経て「文書資料説」と呼ばれる全く新しい考え方によって大きく飛躍しました。

４）文書資料説とは何か

文書資料説とは、５書の中には、神の名をエロヒームと呼ぶＥ資料と、神をヤハウェという名で呼ぶＪ資料、そして申命記資料（Ｄ資料）、祭司資料（Ｐ資料）が基となって編集されているというものです。

ここではＰ資料についてのみ見てみたいと思います。

５）祭司資料

創世記　天地の創造から人の堕落、ノアの洪水、バベルの塔の物語に続いて、アブラハムを初めとする族長たちの物語が含まれ、イスラエルが神の約束の地に至りながら、エジプトに住むようになった次第が語られています。

このＰ資料の神の名は、Ｅ資料と同様にエロヒームです。

お話したいのは、そのＰ資料の成立の歴史的背景です。Ｐは、前586年にエルサレムがバビロニアによって占領され、ユダヤ王国が滅亡した後、バビロンに捕囚されたユダヤ人によって次第にまとめられたもので、資料の中で最も新しいものです。

当時バビロンにおいては、太陽＝神、太陽神＝創造主でした。しかし、Ｐがここに、太陽に先立つ光について述べ（「光あれ」）、しかもその光さえ神が創造したと言うのです。これは特筆すべきことす。

では、そこに込められている意味はどんなことなのでしょうか。イスラエルの民にとって、この時代はイスラエル史の中でも最も暗い捕囚の時代でした。虫けら同然の捕囚の身の民は、自分たちの神の民としてのアイデンティティーも失い、虚無の中に生きていました。しかし、

その時代にこの創造物語は成立したのです。この時代背景が、この記事を理解する一つの鍵になります。

彼らは、バビロニアの多神教と偶像礼拝を強いられた中で、唯一の神、創造主なる神を信じ、神は必ず自分たちを守り、この苦難から解放されるとの希望に生き、そこに「光」を見いだしました。従ってこの光は、神の救いの光であったと思われます。つまり、この光が輝くとき、この世界を覆っている暗闇は去り、全てのものがはっきり見えるようになり、自分たちの存在の意味が明らかにされるということです。神は、この世界に、創造において根源的に関わってくださったのです。

イザヤ60:1-3

そしてもうひとつのこと、このP資料による創造物語の特徴的な言葉は、「神はこれを見て、良しとされた」です。神は、創造した世界を喜びの対象として見られるのです。「神は〜良しとされた」、ここには、根源的な「存在」の肯定と評価があります。しかし、いつしか世界は、その被造物としての世界を逸脱し、変質し、神の評価ではなく、自己の評価を求め、神の肯定ではなく、自己肯定を求めるようになってしまいました。

まさに私たち人間は今、捕囚のもとにあるのです。しかし聖書は、人間も世界も神の「良し」のもとに、まことの平和があることを告げています。私たちは、また私たちの日本福音ルーテル教会は、この「良し」のもとに、新しい一歩を21世紀に向けて踏み出していかねばならないのです。とすれば、この「良し」は、決して現状肯定をゆるす「良し」ではないことがわかります。この根源的「良し」が、否定され、

鉄道唱歌で覚えよう
旧約聖書39巻

一　創・出・レビ・民・申命記　（モーセ五書）
　　ヨシュア・士師・ルツ・サム・列王　（申命記的歴史）
　　歴代・エズ・ネヘ・エステル記　（歴代志的歴史）
　　ヨブ・詩・箴言・伝道・雅歌　（文学書）
二　イザヤ・エレ・哀・エゼ・ダニエル　（三大預言書）
　　ホセア・ヨエ・アモ・オバ・ヨナ・ミ　（アッスリヤ時代）
　　ナホム・ハバクク・ゼパニヤ書　（同末期）　（十二小預言書）
　　ハガ・ゼカ・マラキで三十九　（ペルシャ時代）

（浅見定雄「旧約聖書に強くなる本」より）

無視されている現実の中で、この「良し」を聴き得た私たちは、直ちに「良し」の回復のために、課題を負う者とされるのではないでしょうか。私たちキリスト者、また私たちの教会は、この「良し」を担い、証しし続ける者なのです。このLAOS講座を学びながら、これまでの私たちが福音を抽象化、個人化、観念化、少々難しく言えば、非歴史化してしまってはいないかということを、吟味反省してみることは、大切なことだと思います。

2．歴史

さて、話をイスラエルの歴史に戻しましょう。旧約聖書は天地創造の物語、そしてノアの物語に続いて、アブラハム、イサク、ヤゴブ、ヨセフの物語を通して、神の救いのドラマの始まりを語っていきます。しかしそれらは、歴史の中では「前史」であって、神の救いのドラマ、歴史であることは間違いないのですが、いわゆる歴史的な記述ではありません。しかし、イスラエル民族がこのアブラハムから始まっていることは紛れも無い事実です。紀元前2千年に遡る族長たちの口伝(くでん)伝承が、約千年後の時代に神の祝福の基の出来事として記され、族長たちがその神の約束と導きを信じて生きた事実をこの記事は伝えています。

1）出エジプトと十戒・モーセ

イスラエル人のエジプト脱出は、出エジプト記5章—15章に記されています。エジプト王（ファラオ）はイスラエル人に強制労働を強いました。この王は、エジプト第19王朝のラメセス2世（前1290〜1224在位）です。彼は、イスラエル人がナイル川の河口の要地ゴシェンで繁

出エジプト記　モーセが神の召しを受け、イスラエルの民を率いてエジプトから脱出し、シナイ山で神の契約と「十戒」を受けたこと、それと共に当時のイスラエルに与えられた多くの戒めがしるされています。

栄することはエジプトにとって危険であると考え、彼らを奴隷化し、ナイルデルタ東部の都市開発に投入、酷使し、民族の消耗、弱体化との一石二鳥を謀ったのです。しかし彼らが屈しないので、ファラオは、男子の新生児を殺すように命じました。この時期に生まれたのがモーセです。彼は、ナイル川に放たれ難を逃れますが、王女に拾われ、養子として成人します。

出エジプト1-2章

モーセはあるとき、イスラエル人を酷使するエジプト人を、その正義感から殺してしまいます。そして、アカバ湾の東にあるミデアン族の地に逃れます。あるとき、羊を追いながらホレブ山で不思議な体験をします。そこで神の顕現に出会い、苦しむイスラエル人を救えとの命令を受けます。このとき、神の名が示されるのです。神ご自身が「私はあってある者」と言われます。これは全ての存在をあらしめる者の意、あらゆるものの存在の根拠、唯一の創造主の意です。

出エジプト3:1-12

モーセは、兄のアロンと共に民を率い、紀元前1290年頃エジプトを脱出します。600台の戦車をもって追跡して来るエジプト軍。そして行く手を紅海に阻まれたとき、神は海を二つに割り、彼らを導くのです。イスラエル人にとって、この体験は劇的であり、感動的に語りつがれ、民族の歩みの中で常に心の支えとなり、どんな時代にも民族の困難を乗り越えていく原動力となっていきました。

出エジプト14章

レビ記　レビ族はイスラエルの中で祭司の役割を果たした部族です。この書は彼らの役目であった礼拝と祭司職に関する細かな規定がしるされています。

さて、聖書に拠れば、彼らの旅は40年に及んだとあります。創世記に「乳と蜜の流れる地」と言われた、故郷カナンへの民族の旅は過酷なものでした。シナイの砂漠、荒野は一切の生命を拒絶するかのような自然環境です。それは、

神から与えられた試練でもありました。

しかし、その度に神は、命の水とパン（マナ）を与えられました。

ところで、十戒のことはヘブル語で「アセレス・ハッデバリーム（十の言葉）」と言います。

出エジプト20:4

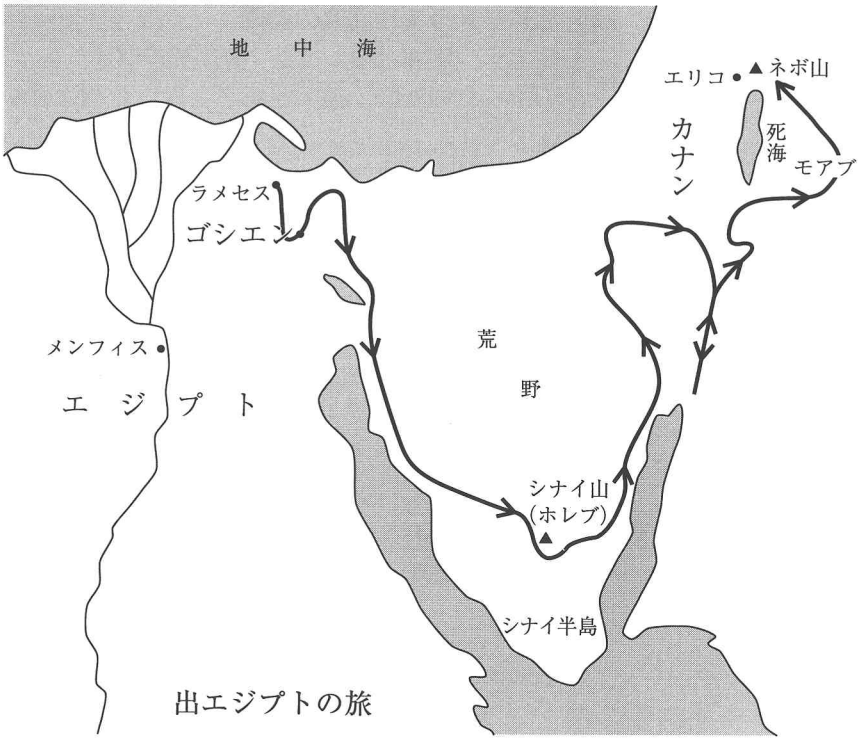
第二戒「あなたは、いかなる像も造ってはならない」。ここで刻んだ像は何を意味しているのでしょうか。ここでは、ファラオを想起する必要があります。ラメセス２世は、その治世が60年にも及んでいることから、非常に有力な王であったことが分かります。彼は、その治世の初めにはヒッタイト帝国と戦い、その後はもっぱら国内政治に意を用いて、国内の支配力を強化しました。そこで彼は、エジプト三千年の歴史の中で、最も多くの自分の像を造らせたようです。支配者の神格化、像は独裁者に見られる傾向ですが、エジプトにおいては、ファラオは神々の中で最高位の神であって、彼に対する絶対の服従と礼拝が要求されたのです。

民数記　出エジプトの後、荒れ野を旅するイスラエルの民の人口調査が記されていることから、民数記の名があります。荒れ野での出来事といろいろな律法がしるされています。

そうした中で、ファラオを神格化する支配体制が出来上がっていきました。あのピラミッドは、エジプトの強大な権力がその根底にあることを示しています。その権力のもとで、国民は働かなければなりませんでした。しかし、一方それが、彼らの生を成り立たせていることを彼ら自身が知っており、疑問や反抗の余地はなかったのです。彼らに教えられていたことは、従順と勤勉な労働だけでした。

申命記　「申命」は神の戒めを繰り返して述べるというほどの意味です。荒れ野の旅を導いたモーセが約束の地を眺めつつこの世を去る前に残した決別の説教の形で、たくさんの律法がまとめられています。

一方、元来イスラエル人は、羊や山羊のような小家畜を飼う人々でした。つまり、自分の民には支配者も持たず、自由な「生」でした。ですから、ファラオの偶像が何を意図されていて、何を目的として造られたものであるかが見



出エジプトの旅

えていたのです。神は権力者ではなく解放者であり、大事なのは自分たち一人ひとりの人間であるということを、彼らは知っていたのです。その意味で、偶像の否定無くして、人間の自由はないのです。

いずれにしても、イスラエルの民は、この十戒によって、自分たちが神の民であるという自覚を決定的なものにしました。そして、彼らは十戒を入れた「契約の箱」を先頭にして進み、カナンの約束の地に入っていきました。モーセは、約束の地力ナンを目前にして、モアブの地で息を引き取ったのです。

申命記34章

2）イスラエル民族の基礎

(1)カナン定着とヨシュア（前1250年頃）

モーセの死後、彼の後継者となったのはヨシュアです。若きヨシュアの活躍は、めざましいものでした。当時のカナンは、エジプトの支配も及ばず、カナン人やアモリ人（セム族）によって治められていました。彼らは、農耕を主にした文化的水準の高い生活を営んでいました。

ヨシュアは、ここでも契約の箱を先頭にしてヨルダン川を渡ります。そして、強固な城壁を持つエリコの町を陥落させ、次々と戦いを続け、カナン南北に領土を拡大していきました（ヨシュア６、10章）。カナンに彼らが定着するということは、これまでの遊牧、移動型から、農耕、定着型への生活様式の変化を意味しました。住むところも、これまでの天幕（テント）から、家屋へと変わっていきました。人間は、環境によってその生活形態は大きく影響を受けますが、それは、精神的面にも言えることです。彼らは、カナンの農耕宗教であるバアル教に影響を受けるようになってしまいます。バアル信仰とは、カナンの神々の主神バアルに大地の生産力を帰する、農民の信仰です。その後彼らは、自分たちの信仰生活を守るために、長くバアル信仰と戦わなければなりませんでした。

2．歴史書　モーセなきあと、ヨシュアによって導かれたイスラエルの民が、約束の地カナンに入りますが、その歴史が進展すると共に、信仰的には次第に下降線をたどります。ついにはイスラエル民族が建設した王国は滅ぼされ、アッシリア、ついでバビロニアの捕虜となります。その中で信仰的集団としてのイスラエルの団結が目指され、結果的には救い主への備えがなされます。その歴史が12の書物になっていますが、その中でルツ記とエステル記は歴史的な「物語」と見られます。

(2)士師たち

この定着からサウルによる王国成立までを「士師時代」と呼びます。ヨシュアの死後、指導者を失ったイスラエル民族は、前1200年頃から約200年間にわたって、内部的にはバアル神への偶像礼拝、外部的には周囲の諸部族との衝突という不安定な時代を迎えることになってし

ヨシュア記　ヨシュアを指導者とするイスラエルの民が、40年の荒れ野の旅を終えてカナンに侵入し、その地を割り振って住み着くようになる次第と、ヨシュアの民に対する勧めが記されます。

士師記　ヨシュアの後、信仰あつい12人の士師（さばき人）たちが、次々にイスラエルの指導者の役目を果たしてゆく時代の出来事の記事です。

士師たち
- 大士師
  - オテニエル、エホデ、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソン
- 小士師
  - シャムガル、トラ、ヤイル、イブザン、エロン、アブドン

まいます。そんなとき現れたのが「士師」たちでした。士師とは「さばきつかさ」ショーフェティーム（英語でJudges）と呼ばれる、言わば地方の指導者で、神からの霊の力、特別な賜物を持つ者でした。士師記によれば、オテニエル（3:7-11）、エホデ（3:12-30）、デボラ（女預言者4-5章）、ギデオン（勇者6:1-8:32）、エフタ（10:6-12:7）、サムソン（怪力13-16章）の6人が大士師と呼ばれ、シャムガル（3:31）、トラ（10:1-2）、ヤイル（10:3-5）、イブザン（12:8-10）、エロン（12:11-12）、アブドン（12:13-15）の6人が小士師と呼ばれています。

彼らは、しばしばイスラエルの危機を救いました。そうした過程の中で、イスラエル民族を最も悩ませる強力な民族が現れ、侵入してきたのです。それはペリシテ人（海の民）です。彼らは、前12世紀前半に地中海のクレタ島から渡来し、優秀な鉄製の兵器を持ってパレスチナ中央部に勢力を振るいました。後に、カナン全土をパレスチナと呼ぶようになったのは、この「ペリシテ人の地」の意味に由来しているのです。

パレスチナという名の由来

このような不安定な状況の中で、人々は強力な統一的指導者を求めるようになりました。そこで、最後の士師、また最初の預言者と呼ばれる宗教的指導者サムエルが現れます。前1020年頃のことです。

最初の預言者サムエル

サムエル上17章

サムエルは、ベニヤミン族出身のアンモン人との戦いで活躍したサウルを、イスラエルの最初の王に任命し、王制を敷き、その後430年間にわたる王国時代という歴史が始まります。その430年間の内容は、サムエル記上下と、列王記上下、また歴代誌上下に記されています。

サムエル上9:1-10:16、特に10:1参照

3）統一王国時代

(1)サウル　前1020年～1000年

サウル王は、軍事的組織を強化して、徴兵、騎兵、歩兵を編成しました。千人隊、五十人隊

サムエル記上17章

など組織化して、宿敵ペリシテ人を一掃し、民衆の期待に応える功績をあげました。サウルの王国の成立については、サムエル記上８-12章にかけて記されています。しかし、サウル王

サムエル上31章、下1章

は、ペリシテ人とのギルボア山での戦いで戦死してしまうのです。サウルの在位は、前1020年～1000年と言われています。サウル王の死後２代目の王となったのは、ダビデです。

サムエル記上下　士師の時代が終わって、イスラエルが王国として形を整える事情が描かれます。サウルに続いてダビデが王となり、国を盛んにしますが、ダビデの個人生活は信仰的であると同時に、家庭的に弱点をもっていて、問題の種となります。

(2)ダビデ　前1000年～961年

ダビデの生涯は波乱に富んでいます。彼は、ベツレヘムの羊飼いエッサイの子として生まれ、勇気ある美少年でした。彼は琴が上手く、召し出され、孤独な晩年のサウルに仕え、慰めます。しかしサウルは、ダビデの非凡な才能に嫉妬するようになり、あつれきが生まれていましたが、サウルは戦死してしまいます。

サムエル下1-4章

サウルの死後、民衆の人気と支持を受けたダビデが王となりました。

サムエル下5:6-10

以下、ダビデのめざましい活躍の跡をたどってみましょう。先ず、イスラエル南北統一のため、エルサレムを都と定めました。そこに「契約の箱」を置き、エルサレムを、宗教的にも政治的にもイスラエル統一王国の中心地としたのです。そしてダビデは、周囲の外敵を制圧し、財政も強化していきました。祭司制度、官僚制も整えられ、ここにイスラエルの歴史上最高の繁栄期が実現したのです。イスラエル人にとって、ダビデの名と、この繁栄の時代は、忘れら

れないものとなりました。彼のような名君は、その後再び出現しなかったからです。だから、ダビデは理想の王として、彼らが国家を失った後にも、自分たちを救うメシヤ・救世主は、ダビデの子孫から現れると考えられるようになったのです。そして、主イエスがベツレヘム（ダビデの故郷）生まれのダビデの子孫、即ちメシヤであるという考えにつながっていくのです。

しかし、ダビデも、晩年は三男アブサロムの反乱をうけることになります。ダビデの王位継承の争いについては、列王記上1:1-2:11に記されています。そして、前961年、その後継者争いの中で、偉大なダビデの後を継いだのはソロモンです。

サムエル下13-20章

⑶ソロモン　前961年〜922年

その王位継承には、醜い争いが起こりましたが、彼は前961年に即位しました。賢者として非凡な才能を持つソロモンは、その才能を発揮し、父ダビデの王国を発展させました。何よりも商才にたけた彼は、フェニキヤとの交易によって、イスラエルに経済的、物質的繁栄の絶頂期をもたらしたのです。

列王上1-2章

ソロモンの業績は、何と言っても13年間の労力を費やして、前958年にエルサレム神殿を建築したことでしょう。しかし、外国との交易は、他国の異教をも輸入することになり、ヤハウェ信仰をないがしろにし、また、彼の権力主義が人々の反感を買う結果となり、そのソロモン王国は、前922年の彼の死によって崩壊しました。サウルから僅か３代、たった100年で、イスラエル統一王国は崩壊していったのです。

列王上5-8章

列王上11章

4）王国分裂時代と滅亡

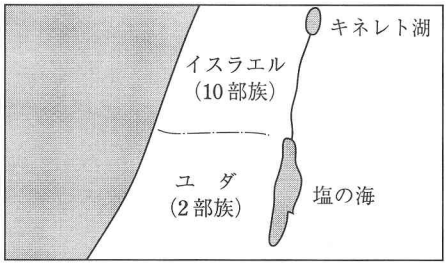
ソロモンの死後統一王国は、南北に分裂してしまいます。その後3世紀にわたる民族の運命は、苦難に満ちており、滅亡に向かって暗黒のトンネルを突っ走るようです。その歴史は列王記、歴代誌、それに預言書が記しています。

さて、前922年のソロモンの死後、その子どものレハベアムが、都エルサレム（南部）で後継者として即位しますが、北部の人々はこれを拒否します。そして、エフライム族のヤラベアムを王とします。

列王上12章

ここに、ダビデ王とつながるユダ民族による「南王国ユダ」と、エフライム族を中心に10部族が連合する「北王国イスラエル」とに分裂し、2つの王国の分裂時代を迎えることになります。

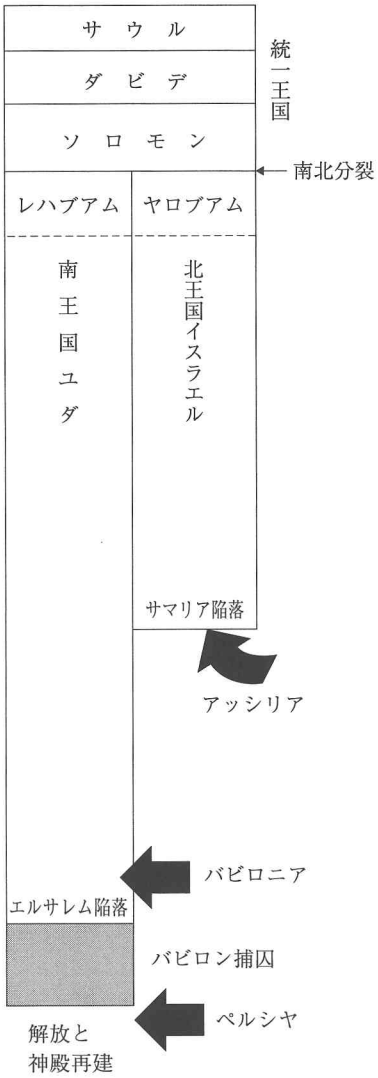
列王記上下・歴代誌上下
ダビデの後継者ソロモンによって、イスラエルは繁栄を極めますが、それも長続きせず、やがてイスラエルとユダの南北二王国に分かれて争い、さらにいずれも外敵アッシリアとバビロニアのために滅亡するまでのことが記されています。エリヤ、エリシャ、イザヤらの預言者の活躍、ヨシア王の宗教改革の出来事もこの時期のことです。ペルシャ王キュロスはバビロニアを滅ぼし、バビロニアに捕囚となっていたイスラエルの民は故国に帰ることを許されます。



(1)北イスラエル王国の200年間～722/1年

もともとパレスチナは、地理的な条件など、南北に対立するいろいろな要因がありました。

例えば、北部は、比較的肥よくな平地に農業が発達し、また古代世界の交通の要路にあたり、外部からの影響も多く受け、何と北王国は、200年の間に9つの王朝、19人の王が乱立しました。特に、異教の流入が、ヤハウェ信仰を危うくすることがしばしばあったのです。



ヤラベアム王は、分離独立後、直ぐに都を定めることができず、シケムと、ペヌエルに支配の中心を置きました。しかし、神殿はエルサレムにあったことが、決定的な弱点となったのです。「契約の箱」は、エルサレム神殿にあったからです。北王国は、政治経済は繁栄したのですが、社会悪と、道徳の不敗が国に渦巻き、ヤハウェ信仰は危機に陥りました。

⑵南ユダ王国の335年間〜587年

一方、南部は、山岳地帯や荒れ野が広がり、経済的に貧しく、文化的にも遅れていました。しかし、ヤハウェ信仰は保てたのです。南王国は安定した歩みを続け、この結果、両国の滅亡に130年の差ができました。しかし、ウジヤ王の時代、ここでも社会悪と、道徳の不敗が渦巻き、ヤハウェ信仰は危機に陥ったのです（この南北王国の王位継承変遷史は、列王記上12〜16章にその一、下11〜25章にその二が記されています）。

さて、この危機的な時代に活躍したのが預言者なのですが、その働きはあとで学ぶこととして、もう少し歴史を見ていきましょう。

⑶滅び行く２つの王国

さて、北王国の200年、南王国の335年という時代は、イスラエル民族の歴史としては、衰退の時期であると言えます。しかし、南北の王国を治めた39人の王たちを聖書に追っていくと、ある感慨が浮

かびます。例えば、預言者エリヤの支援を得て、バアル礼拝を追放した北王国のヒエフ王のこと、偶像礼拝を一掃し、エルサレムにヤハウェ信仰を集中させようとした南王国のヒゼキヤ王、ヨシヤ王の業績は、この暗いイスラエル民族史の中に灯した宗教改革の灯火であったからです。このヨシヤ王の改革の理念は、イスラエルが神の民として、約束の地での祝福を全うするために、誘惑を排して、モーセに帰れというものでした。

列王上18章

列王下12章以下

また、1年持たなかった王もいます。北のジムリ王の王位は、7日間だったといいます。南のヨアハズ王も、たったの3ケ月の在位であったようです。そこには、血で血を洗うような争いがあったのです。

列王上16:9-20

列王下13:1-9

こうした南北王国の衰退の大きな原因は、異教礼拝にあることを聖書は語っています。ヤハウェ信仰は、イスラエル民族の生命線であるにも関わらず、それが棄てられるということが、直ちに王国存立の精神的基盤を失うことにつながったのです。

さらにそれは、倫理の荒廃、社会正義や、人権が軽んじられていくことでもありました。そのような状況の中で、二つの王国は、周囲の強国の侵略を受けることになったのです。イスラエルを取りまくこの頃の世界地図を見てみると、イスラエルは、地理的には北のシリヤと、南にはエジプトという列強にはさまれていることが分かります。この南北の列強の脅威は避けられなかったのです。また、東にはアッシリア、バビロニア、ペルシアという大国の脅威の荒波の中で、小国イスラエルは、木の葉のように翻弄されていったのです。北王国は、そのア

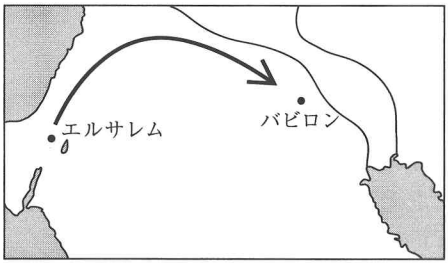
ッシリアによって前721年に陥落、北王国のイスラエル人は、アッシリアへと捕囚され、アッシリア人がそこに住み、北王国は歴史の中から
列王下17章 消えてしまったのです。

かろうじて生き残っていた南王国も、それから135年後に、そのアッシリアに代わって台頭した、新バビロニア帝国のネブカドネツァル王によって滅ぼされてしまいました。

ダビデの町エルサレムは、前587年に陥落、あのソロモンの神殿と共に徹底的に破壊され、そして、ユダの人々はバビロンに捕囚されてし
列王下23章-25:30 まうのです。ここに、サウル以後400年のイスラエルの王国の歴史は、滅亡という形で終わりました。

5）バビロン捕囚時代　前587～538年

彼らの捕囚は3度にわたりました。そして、
エレミヤ52:30 その数は4,600人と、記録されています。これは当時、成人男子のみが数えられるので、実際は、15,000人位と推測されます。私たちは、バビロン捕囚をよく知っています。それは、ユダヤ人全てがバビロニアに連れて行かれたかのように感じていましたが、実際のこの数をどう思うでしょうか。意外と少ないと感じるのではないでしょうか。前8世紀末のイスラエルの人口が25万人と言われていますから、捕囚の人数



は、そのパーセンテージから言えば、多いとは言えないのです。しかし、彼らは支配階層、祭司、技術者であって、ユダ王国の中核を成す人々だったのです。残された一般大衆は、多くいたわけですが、もはや彼らには指導者もなく、異教に汚されたものとなってしまいました。と言うことは逆に、イスラエル民族の信仰は、少数であっても、バビロニアにいる捕囚民たちの中にあったということが言えるのです。

エゼキエル33:24-29、イザヤ57:3-13他

未知の国に連れてこられた南ユダの人々は、このときから約50年の間「ユダヤ人」という名で、屈辱的な時代を送ります。その人々の悲しみと苦しみを記した例として、詩篇137編や88編も読んでみましょう。これは、祖国を奪われたバビロン捕囚の悲しみを歌った詩篇です。彼らは、国土も王も神殿も、長い民族の歴史の中で与えられた神の恵みの賜物と信じてきましたが、今やその全てを失ってしまったのです。彼らの民族としての思いは、なぜ、自分たち神の民、選ばれたイスラエルの民が、異教の神の民バビロニアの下で、このような苦しみに遭わなければならないのか。ヤハウェは義を忘れたのだろうか。神は正しい神なのだろうか。といった根本的な疑問が起こってきたのです。彼らは苦しみました。

しかし、このような民族の危機、信仰の危機の時に現れ、悩み苦しむ民に忠告と励まし、慰めと希望を与えたのが、預言者と呼ばれる人々なのです。

エズラ記・ネヘミヤ記
捕囚の民が故国に帰還する次第と、神殿を再興してエルサレムをもう一度聖なる都とするための処置とざんげが書かれています。エズラ記ネヘミヤ記に書かれた出来事の後、ネヘミヤがエルサレムに石垣を築き、エズラが神殿のために新しい規定と律法を公布したことが記されます。

6）解放・帰還・再建

(1)エズラ記・ネヘミヤ記

エズラ・ネヘミヤ記は、前300～250年に書か

エステル記　ペルシャにいた離散のユダヤ人の危機を、一人の女性が救った物語。ルツ記と共に、一連の歴史とは少し異なる物語で、共に女性を主人公としています。捕囚から帰還したのちの時代が背景になっています。

分類としては歴史の中に入れられる。

中間時代
解放、帰還、神殿再建ののち、紀元前331年からアレキサンダー大王の遠征、ギリシア（セレウコス朝）の支配が続き、さらに紀元前63年からはローマの属領となる。救い主到来までのこの期間を中間時代と呼ぶ。

れたもので、元々一つの書物が二巻に分けられたと言われています。そしてそれは、エズラ・ネヘミヤの改革と言われるように、歴史と深く結びついています。捕囚直後のエルサレムが舞台で、キュロス王の布告とエルサレムへの帰還、学者エズラの神殿再建、また、ペルシャ王の侍従であったユダヤ人ネヘミヤの活躍を記したものです。つまり、実際の成立と内容の舞台となる時代には約200年も差があるということです。と言っても、既に見たように、捕囚期に、P資料（p.17参照）によって創世記や出エジプト記などが編纂されたことを思い出すなら、そんなに驚かないのではないでしょうか。中世には、このエズラがモーセ５書の編者ではないかと言われたこともありました。なぜエズラかと言うと、ネヘミヤ記８～10章にある律法の朗読の記事がもとであり、最近、中世とは違う形で再認識されています。エズラは、ユダヤ教団つまり、モーセの律法によるヤハウェ宗教の成立・ユダヤ教団の成立（前398年）をもたらした重要な人物なのです。

３．預言者を通して語られた救いのドラマ

１）預言者とは誰か

４．預言書　ソロモン王時代に頂点に達したイスラエルの栄華が衰退し、国の独立が失われたころ、本来の神信仰に帰るように説いた預言者たちが現れました。神はそのみことばを彼らに託し、民に悔い改めを説かせ、救いの約束を与えられました。列王記にはエリヤ、エリシャらの活動が記され、ヘブル語聖書では

預言者は、旧約聖書において、特色ある存在として、イスラエル民族の歴史に大きな足跡を残した人々のことです。そして、彼らの存在と言葉は、旧約聖書の三分の一の量を占める「預言書」に記されています。彼らは、神から「言葉を預かる者」ナービーと呼ばれています。

最初の預言者は、前９世紀に活躍したエリヤとエリシヤであり、彼らの活躍の様子は列王記に記されていますが、そこには彼らの預言の言

ヨシュア、士師、サムエル、列王が「前の預言者」とよばれています。文書の残っている預言者としてイザヤ、エレミヤ、エゼキエルは、分量的にも内容的にも大預言者とよばれますが、時代的には、アモス、ホセアらの方が彼らより先になります。哀歌とダニエル書は預言書と少し性格が違いますが、ふつうその中に含めて数えられます。

葉、内容そのものは文字として残されてはいません。最初の「記述預言者」は、前8世紀のアモスです。そして、イザヤ、エレミヤ、エゼキエルを、その記述の分量から「三大預言者」と呼び、ホセアからマラキは「十二小預言者」と呼ばれます。

2）アモスは何を語ったか

アモスは、北イスラエル王国のヤラベアム2世（前786〜746年）の時代に現れた預言者です。

アモス書2:6-8を読むと、この時代は貧しい者を金で売ったり、親子で同じ女性のもとに通って神の名を汚し、科料罰金で得たお酒を神殿の中で飲んでいるような、上流支配階級や宗教指導者の堕落ぶりはひどかったことが分かります。外面的な繁栄の蔭に宗教生活は乱れ、社会には不義不正が満ちており、礼拝も形骸化し、生命を失っていたのです。

アモス書　紀元前8世紀の半ばに出た預言者アモスによるもので、預言文書としては最も古いものといわれます。社会の不義不正に対する神の審判を宣告し、神の義を強調しています。

田舎で羊飼いをしていたアモスは、このような支配階級に対して「主ヤハウェはこう言われる」と、神の正義を語り、激しい怒りを持って預言しました。彼の言葉は感動的です。「主を求めよ、そして生きよ」、「善を求めよ、悪を求めるな、お前たちが生きることができるために」、「正義を洪水のように、恵みの業を大河のように、尽きることなく流れさせよ」。これらの言葉は「正義の預言者」と呼ばれるアモスの思想の根本を貫くものでした。これは、真剣に神の言葉を聞かなくなった民への痛烈な警告でした。

アモス5:6

アモス5:14

アモス5:24

しかし、あまりにも厳しい預言のために、アモスは支配者たちの反感を買い、追放されま

アモス7:10-13

す。その後のアモスがどうなったかは、全く分かりません。しかし、彼の「正義の預言」は、イスラエルの預言者の、前721年首都サマリヤの陥落によって現実のものとなるのです。

3）ホセアは何を語ったか

北王国で、アモスの少し後に現れたのがホセアです。人々の生活はさらに悪化、退廃が進み、宗教状況はヤハウェ礼拝の名の下に、バアルが礼拝されて、結果、祭司も巻き込んで、性的不道徳が行われていました。このように退廃腐敗したイスラエルに対して、ホセアの預言はどのようなものだったのでしょう。

ホセア4:4-14

ホセア書　紀元前8世紀頃、アモスに少し遅れて北王国に現れた預言者ホセアは、自分の失敗に終わった結婚生活の中から、あるいはそれに重ねて、神の憐れみを預言しました。

ヨエル書　ヨエルは南王国の預言者で、いなごの災害に事寄せて、終末の主の日について語っています。

オバデヤ書　旧約聖書中最も短い書で、捕囚期に書かれました。エドム人のおびやかしと、究極的な神による望みを語っています。

アモスの預言は、真正面から神の正義を突きつけるもので、民の罪に対する審判を警告するものでした。しかし、ホセアの思想は、アモスのそれとは対照的であり、不信のイスラエルに対する神の愛を説くものだったのです。しかし、それは、彼がアモスと別の預言をしたというのではありません。神のみ心が、アモスには正義として働き、ホセアには愛として働いたということです。

ホセアが「神の愛」を説くようになったきっかけは、面白いことに、彼の体験した悲劇的な夫婦問題でした。彼は、妻に裏切られる体験によって、神に背いているイスラエルの現実に気がつきました。イスラエルが神に対してなすべきことは、もう一度神の愛を取り戻して、誠実を誓うことではないのかと思い、彼は妻を赦したのです。ホセアは、神が、自分に背いて罪を犯しているイスラエルの民をなお赦し、愛して下さっていることを知ったからです。彼の経験した個人的な不幸は、神の絶対的な真実の愛を

示すために用いられたのです。ホセアは、それ故「愛の預言者」と言われるのです。

4）イザヤは何を語ったか

イザヤは、南王国ユダに現れた最初の預言者です。前742年に、20才で召命を受け、彼はヨタム、アハズ、ヒゼキヤ王の3代にわたって40年も活動しました。彼はエルサレムに生まれ、そこで生涯を送ったのですが、その預言の言葉の内容、また、明快で力強い文体から、豊かな知識と優れた思想を持つ、エルサレムきっての高い学識のある貴族ではなかったかと言われています。

彼は、神殿で祈っているとき、不思議な幻の中で神と出会い「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は地をすべて覆う」（イザヤ6:3）という神の声を厳かに聴くのです。つまり、イザヤが出会った神は「聖なる神」でした。アモスは「神の義」という本質を、ホセアは「神の愛」という本質を示しましたが、イザヤは神の「聖」という本質を示すのです。

この時期、アッシリアのピレセル3世の侵攻によって、南北の王国は大混乱に陥り、南王国も滅亡の危機に直面していました。その時イザヤは、こう語りました。「落ちついて、静かにしていなさい。恐れることはない」（イザヤ7:4）「万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏れるべき方は主。御前におののくべき方は主」と「聖なる神」（イザヤ8:13）への絶対の信頼を寄せ、それ以外のものを頼りとするなと訴えたのです。それは、南王国がエジプトに使者を送り、その力を頼りにしようとしたからでした。「災いだ、助けを求めてエジプトに

イザヤ6章

イザヤ書　預言者イザヤは紀元前8世紀に活躍しましたが、イザヤ書はイザヤ一人の筆によるのではなく、40章以下は背景の時代も違うと認められています。神の民に対する叱責と慰め、ことに40章以下は主のしもべによる解放と救いの希望が告げられています。

ミカ書　紀元前8世紀ホセアからイザヤの時代に活躍したミカによる不義に対する神の叱責と審判、民に対する約束と慰めの預言です。

ナホム書　神の民をしいたげるニネベに対する審判と、神に信頼する民へ復興のよいおとずれが告げられます。紀元前7世紀半ばのこととされています。

ハバクク書　紀元前7世紀末から6世紀にかけての時代に、神の民の罪に対して、神がカルデヤ人を起こして罰したもうが、やがてそのカルデヤ人もその悪によって罰せられ、神の民に最終的な救いが来ることが約束されています。

ゼファニア書　エレミヤの時代の前に活躍したと思われるゼファニアの書で、主の日が異邦人にとってだけでなく、ユダにとっても、恐るべき災難の日であるけれども、少数の残りの者に救いが約束されることが告げられます。

下り、馬を支えとする者は。彼らは戦車の数が多く、騎兵の数がおびただしいことを頼りとし、イスラエルの聖なる方を仰がず、主を尋ね求めようとしない。」（イザヤ31:1）とあります。

本当の平和は、馬や武器によって実現しないということです。さらに「お前たちは、立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることこそ、力がある。」（イザヤ30:15）と言います。イザヤは「激動」のただ中に、聖なる神への絶対的な信頼による「静」を求めたのです。イザヤは、激しく移り変わる南ユダ王国の暗いトンネルの彼方に、一筋の光を見ていました。この悲惨なイスラエルの現実を越えて働く、神の大きなみ心を見ようとしていたのでした。

それは、彼の「残り者シエアルヤシュブ」の思想に表れています。「残り者の預言」と呼ばれるものが、6:13、10:20-22、11:11、17:6に見られます。残り者とは「聖」と結びついている「聖徒」のことです。その残り者の中に、神はあわれみを知らされ、それは、将来新しい王が与えられ、彼によって世界に本当の平和が実現するというもので、「インマヌエル預言」（イザヤ7:14-16）や「メシヤ預言」（イザヤ2:2-4、9:1-6、11:1-9）として記されています。そして、「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び踊れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ、野ばらの花を一面に咲かせよ」という歓喜の言葉で始まるイザヤ書35章は、イザヤ預言のクライマックスでもあります。神の支配の中で、世界と人類とが救い出され、永遠の平和の園が実現することを願う希望の預言、感動的な預言がここに語られているの

です。

エレミヤ書　エレミヤは紀元前７世紀に、南王朝滅亡の危機に際して、神への信頼と服従を語りました。深い個人的な信仰を表しています。

ハガイ書　捕囚後の紀元前８世紀後半、ユダの復興について預言したハガイの書。

ゼカリヤ書　ハガイの少し後に現れ、神殿復興に力を尽くしたゼカリヤの預言で、柔和なメシアの姿を示しています。

５）エレミヤは何を語ったか

エレミヤは、前626年ヨシヤ王の治世12年目に、イザヤと同じように20才の若さで神の召命を受けました（エレミヤ1:2）。彼が活動したのは、あらゆる面で混乱を極める南ユダ王国の末期でした。その預言は、彼がこの時代に出会った二つの事件がその軸となっています。一つは、ヨシヤ王（エレミヤと同年令）の行った宗教改革であり、もう一つは、バビロニアによる南ユダ王国の滅亡と、あの捕囚です。

ヨシヤ王の宗教改革とは、すでに歴史のところで述べましたが、ヤハウェを唯一の神とし、偶像礼拝を禁止し、礼拝所をエルサレムに集中、統一するというものでした。前621年、彼が神殿の修理をしたとき発見された律法の書が「申命記」です。そこで、このヨシヤの改革を「申命記改革」とも言います。この申命記は、旧約聖書の内容に非常に大きな影響を与えています。エレミヤは、この改革の５年前に、預言者としての召命を受け、この改革に賛成し、協力しました。しかし、ヨシヤ王が戦死したことにより、この改革は挫折します。再び、迷信や偶像礼拝が巻き返し、神殿の礼拝は形骸化し、生命のないものに逆戻りしました。

エレミヤは神殿の前に立って、偽りの礼拝を非難しました。そして、神殿の破壊とエルサレムの滅亡を預言します。しかし、エレミヤの真意は人々に伝わらず、神殿冒瀆者として、井戸に投げ込まれるなど、激しい迫害を受けることになります。人々が捕囚民としてバビロニアに引き立てられるとき、彼は、同胞から非国民、

エレミヤ7:1-15

マラキ書　捕囚後の民に、倫理的、宗教的な問題について戒め、主の日の来ることを告げています。

裏切り者として捕らえられたのです。彼は「涙の預言者」「悲しみの預言者」と言われていますが、その生涯は、預言者の苦悩をよく表しています。それは、真実を訴える者にとって避けがたいことであったのかも知れません。「ああ、わたしは災いだ。わが母よ、どうして私を産んだのか。〈中略〉なぜ、わたしの痛みはやむことが無く、わたしの傷は重くて、いえないのですか」、他にもこうした彼の言葉があります。彼は孤独、孤立をイヤと言うほど味わいました。

エレミヤ15:10-18

しかし、この精神的な苦悩によって、彼は神の真実をより深く読み取り、確信し、自分の骨の中に神の言葉が炎のように燃え上がるのを見ます。そして、神への純粋な信仰を貫き通したエレミヤが、悲しみと涙で語る預言は、全く新しい、驚くべきメッセージへと高められていくのです。それは「新しい契約」と呼ばれる思想です。「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。〈中略〉すなわちわたしの律法を、彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らは私の民となる。」何という感動の言葉なのでしょうか。

エレミヤ20:9

エレミヤ31:31-33

エレミヤは、「滅亡」という王国の破局に立って、イスラエル民族の歴史の終局を冷静に見ていました。民が契約を破ったことによる神の審きをです。モーセの律法は、かつてイスラエル民族への石の板に打ちつけられましたが、これからは一人ひとり、個人の心の中に記されると神が言われるのです。

エレミヤ31:32-33

こうした思想は、今までのイスラエル民族の中には無かった新しい思想です。そして、エレ

ミヤの個人的な悲しみと涙の体験の中に示された神のみ心なのです。

信仰は私たちが内面に、心に、どのように神の真実を受け止めるかということです。そして、エレミヤのこの「新しい契約」の預言は、やがて匿名の第二イザヤの預言を経て、主イエスによって実現されることになります。

エゼキエル書　エレミヤの後、バビロニア捕囚時代の預言者エゼキエルの民に対する警告と慰めで、祖国復興の希望を説いています。

6）エゼキエルは何を語ったか

エゼキエルは、南ユダ王国の滅亡前後に、エレミヤに続いて活動した預言者です。彼は、エルサレムで祭司をしていましたが、前597年の捕囚のときに、バビロニアへ連れて行かれました。その5年後に召命を受け、以後20年ほど活動しました。エゼキエルは、捕囚の地バビロンにおける最初の預言者でした。彼は、イスラエルの人々が王国の滅亡、神殿の破壊、さらに屈辱的な捕囚の民として、ヤハウェへの信仰を疑い、絶望している中で活動したのです。彼の思想の特徴は、神の前における人間の生き方を、個人の責任としてとらえようとしていることです。「個」の思想は、エレミヤにも見られましたが、エゼキエルは、国家、民族の滅亡という事実に直面した人々が、もはやこの結果は、先祖のせいや責任だという考えでは問題は解決しないことを語ります。今こそ一人ひとりが、神の前で罪を悔い改め、責任を取らなければ、本当の意味での神との人格関係は成り立たないことを語ります。国家、民族が消滅し、捕囚状況下で「個人の自覚」が主張されるのは、当然の帰結かもしれません。

エゼキエル18:1-32

そしてエゼキエルは、イスラエルの回復の希望を語るのですが、中でも「枯れた骨の復活」

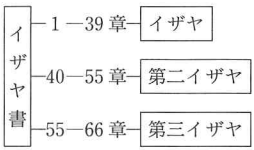
エゼキエル33-48章
エゼキエル37:1-14

の預言は実に印象的な言葉です。「わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に、筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。主はわたしに言われた『霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来たれ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。』わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。」

エゼキエル37:7-10

捕囚にあって希望を失い、骸骨のようになってしまったイスラエルの人々に、神の霊によって、再び生きた人にされるのだという復活の希望を与え、励ます、エゼキエルの感動的な預言です。この預言は、やがてペルシャ王キュロスの出現によって実現するのですが、苦難、滅亡、捕囚、回復という、イスラエル民族の歴史の転換期に、希望の旗を掲げて立ち続けたエゼキエルは、人間が絶望のただ中でどう生きるべきかを教えてくれます。

7）第二イザヤ「神の僕、慰めの預言者」



第二イザヤとは仮の名です。イザヤ書1—39章はイザヤが書いたものですが、40章以下は著者が不明なので、40—55章の著者を第二イザヤ、55—66章の著者を第三イザヤと呼んでいます。第二イザヤは、バビロン捕囚末期に現れ、前538年にイスラエルの民がエルサレムに帰還

するところまで、バビロンで活動した預言者です（従ってイザヤとは2世紀の隔たりがあることになります）。

彼は、エゼキエルに続いて、捕囚で苦しむ人々のために「慰めよ、私の民を慰めよ」との神の召しを受け、慰めと励ましの預言をしました。彼の召命は、40:1—11に記されています。後代のイスラエルの人々は、このような第二イザヤを「慰めの預言者」と呼びました。また、彼は創造者である唯一の神の偉大さを語り、神こそ全世界を支配し導くお方であることを強調しています。つまり、第二イザヤは、イスラエルの苦難の現実を、もっと大きな視点、即ち神の創造と救いの働きという視点から見ようとしたのです。そして、暗闇の向こうから差し込む光を見て、ペルシャ王キュロスがバビロニアを滅ぼしてイスラエルを解放すると預言したのです。

イザヤ40:1-2

イザヤ40:25-26、49:1-6他

イザヤ45:1-5

さて、第二イザヤは、エゼキエルに続いて、イスラエルの苦難の意義を説きました。それは、有名な「苦難の僕の歌」と呼ばれる預言に見られます。それらは4箇所に書かれており、最高の宗教文学と評価されています。それは42:1-4、49:1-6、50:4-9、52:13-53:12の4箇所です。その一部を引用しましょう。

苦難の僕の歌
- 42:1—4
- 49:1—6
- 50:4—9
- 52:13—53:12

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであ

り／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

イザヤ53:3-5

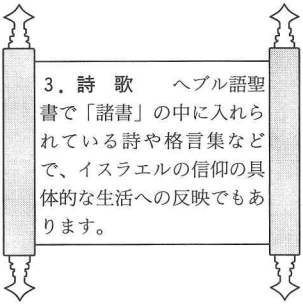
誰からも見捨てられ、肉体的、精神的に大きな苦難の中にいる一人の僕の歌です。「他者の苦しみ」を自分が代わりに背負って苦しんでいるのだというのです。つまり、イスラエル民族が経験している苦難は、無意味なものではなく、他者に仕える「神の僕」として苦難が与えられているのだと語るのです。苦しみは神の与えた審判、あるいは罰という考えしかなかったイスラエル人は、ここに、自己犠牲による愛という全く新しい思想を持つようになったのです。

この苦難の僕の預言は、後に現れるキリストをそのまま預言しているように理解され、主イエス・キリストの生き方と十字架の出来事と結びつけられることになったのです。この第二イザヤの「苦難の僕の預言」は、「彼」のところを「キリスト」に置き換えて読めば、主イエスの姿が鮮やかに浮かび上がってくることに驚かざるを得ません。第二イザヤの預言は、神の救いがイスラエル民族のためという狭い考え方から、全世界の国の人々にも及ぶという普遍的な思想へと広がっていることに注目したいと思います。

このように、預言者たちの言葉と思想を見てくるとき、そこに紛れもない神の救いのドラマがあることが分かります。取り上げた個々の預言者の思想には、それぞれ特色があります。しかし、それらは、決してバラバラなのではな

く、流れがあります。それこそが、神の救いのドラマなのです。神の正義を強調したアモス、神の愛を身をもって説いたホセア、神の聖を示したイザヤ、エレミヤの悲しみの中で語った新しい契約、そしてエゼキエルの説いた「希望」、第二イザヤの説いたイスラエルの苦難の意味、それらは、神の救いのドラマが、イスラエルの歴史の中で語られていった事実そのものなのです。

4．信仰による文学



この分類に属するのはヨブ記、詩編、箴言、コヘレトの言葉、雅歌の５つである。

私たちはこれまで、旧約聖書の律法の書、歴史書、預言書を学んできましたが、最後にもう一つの文書のかたまりである、信仰による文学を取り上げたいと思います。それは、哀歌、詩編、雅歌、ヨブ記、箴言、コヘレトの言葉です。私たちはこれまで、イスラエルの歴史のバビロン捕囚までを見てきました。区分で言うと④までです。そして、その歴史を学ぶ過程で、律法（モーセ５書）、歴史書、預言書の各書に触れてきました。ここでは、残りの歴史の⑤⑥つまり捕囚からの帰還と神殿再建、そして、中間時代と呼ばれる時代の歴史を文学といわれる各書に見てみようと思います。その中には、歴史書や預言書に分類したルツ記、ヨナ書、エズラ記、ネヘミヤ記、哀歌、ダニエル書もありますが、ユダヤ教ではコヘレトの言葉、ルツ記、ヨナ書、エズラ記、ネヘミヤ記が文学と一緒に諸書という区分に入れられています。またダニエル書も区分では預言書に入れましたが、黙示文学だと言ってもよいものです。その前に「中間時代」と呼ばれる時代について述べると、これは旧約聖書の啓示の終結と新約時代の啓示の中間に「沈黙の時代」があったという考えから

の通称です。（また、『アポクリファ／旧約聖書続編』の多くは、この時代に書かれました。）

1）哀歌・雅歌・コヘレトの言葉

哀　歌　滅ぼされたエルサレムの廃墟での悲しみの歌。

哀歌は、バビロニアによって廃墟となったエルサレムを目の当たりにした詩人が、文字通りその悲しみを歌ったものです。わずか5章の短い書ですが、ヘブル語のアルファベットによる、いわばいろは歌のようにその悲しみが歌われています。

雅　歌　もともとはコヘレトの言葉と対照的な恋愛の歌。しかし単に恋愛を謳歌するものとしてではなく、神と人との交わりを歌ったものとして受け取られています。

雅歌は、若者同士の愛を歌うもので、なんと神という言葉が一度も出てきません。恐らく、ヘレニズム時代の前250年頃のものと思われます。

コヘレトの言葉は、捕囚後の恐らく前300年頃、知者によってまとめられた「格言集」と言えます。コヘレトの言葉は、同じくヘレニズムの時代に書かれたものと思われます。文語訳や口語訳（1954）聖書では「伝道の書」と呼ばれ、親しまれてきましたが、このコヘレトとは、まさに会衆を召集する者、あるいは説教者、伝道者という意味のヘブル語です。

コヘレトの言葉　箴言などと共に、智恵文学とよばれる部類に属します。実生活に対する無常観や懐疑が吐露されて、伝統的な信仰を問いなおそうとしていますが、基本には神への信頼があります。「コヘレト」は集会の招集者あるいは集会の中で語る者を意味し、以前は「伝道の書」と呼ばれていました。

「全ては空しい」と語る彼の言葉は、私たち日本人に共感を呼ぶものではないでしょうか。しかし、その空しさは、我々日本人の世界観、死生観とは違うと思います。彼は「空」を是認されるべきものではなく、否定されるべきものとして語っているのです。これが書かれた時代は、ユダヤ教は形骸化し、信仰は生命を失いかけていました。矛盾に満ちた人間の現実、退廃、無気力さを乗り越えるすべを、彼は独特な言い方で語っているのです。それは何事にも時があり、神は永遠を思う心を人に与えられると

いう言葉が物語っています。人生の矛盾の中でこそ、神を信頼し生きていく信仰を、彼は私たちに語りかけているのです。

ルツ記　士師時代を舞台とする女性ルツの短い信仰的物語。

ヨナ書　預言者ヨナが、異邦人の町ニネベに悔い改めを説くように遣わされた教訓的な物語で、福音書にもキリストの型を示すものとして引かれています。

ダニエル書　物語と幻の部分からなり、「人の子」のような者がとこしえに支配するためにやってくる希望を語っています。幻を通して神のみわざを語る、いわゆる「黙示文学」の代表的な書です。

2）ルツ記・ヨナ書

ルツ記・ヨナ書はどちらも4章しかない短編の物語です。エズラ・ネヘミヤの改革後の時代に書かれたものです。しかし、旧約聖書の中で重要な文書と言えます。これらは前400年頃、エズラ・ネヘミヤの生きていた頃の作品です。

この頃のユダヤ教は排他的なものでしたが、それに鋭く抵抗する物語、愛の物語です。

3）ダニエル書

また、ダニエル書は、黙示文学、抵抗の文学と言われ、時代的に言えば、ヘレニズム期に、ギリシア化政策によりユダヤ教を迫害したアンテオコス4世のもとで苦しむ人々に、希望を与えるために書かれたものです。

4）詩編とヨブ記

さて、まだ詩編とヨブ記が残っています。どちらもその作者、年代を確定することは、困難なことです。

ルターが「聖書全体の縮図」と呼んだ詩篇には、神、自然、世界、歴史、社会、人間、罪、苦しみ、祈り、感謝、懺悔、喜び、嘆き、不安、死などの人間の問題が含まれています。詩編はヘブル語聖書の名称では「テヒリーム」で、その意味は「賛歌」です。英語では、Psalms（サームス）と言いますが、これはギリシア語の「プサルモス」弦楽器を奏でること、またそれに合わせて歌うこと、という語に

詩　編　神殿における讃美歌、個人的な嘆きや願い、感謝の歌など、イスラエルの民の信仰の詩集です。「律法」がモーセに帰せられているように、詩の多くがダビデのものとされています。

由来しています。

詩編は、既に述べたように、長い時代にわたって、異なった詩人により、さまざまな背景のもとに書かれたものですから、それらに統一ある神学体系を求めるというのは、困難な仕事です。さらに、これら150編の詩を神の名（呼び方）を手がかりに分類してみると、１編～41編がヤハウェであり、42編～89編はエロヒームが用いられ、90編～150編がヤハウェとなっています。

また、グンケルという学者は、以下のように分類しています。１賛美の歌、２民族（共同体）の嘆きの歌、３王の歌、４個人の嘆きの歌、５個人の感謝の歌。

他にも、信仰的な視点から分類してみると、１祈り、２賛美、３悔い改め、４とりなし、５信仰の告白、６教訓（知恵、神への奉仕）、７神への訴え（義人の苦しみ、）等にも分類することができるのではないかと思います。

しかし、既に述べたように、詩編は、王たち、祭司たち、預言者たち、知恵者たち、或いは、無名の詩人たちによって、それぞれの背景を持つものが、混在しており、詩編の一つ一つを、一つの類型に分類することは、なかなか困難です。それは、詩編が生命的内容を持っているからで、例えば、一つの詩の中に嘆きと賛美とが織り込まれて歌われているものもあるからです。一つの詩が、二つ以上の類型に該当することもあるし、読む者が詩の内容のどこに視点を置くかによっても、一つの詩が違った類型にあてはまることも起こり得るのです。ある人が、これは嘆きの歌だと言っても、他の人は、これは賛美の歌だと考える可能性もあるわけで

す。いずれにしても詩編は、神の語りかけに対する人間の応答です。詩編において詩人たちは、自分の深い体験と、喜びや悲しみ、希望と恐れ、喜ばしい期待と辛い失望、神への深い信頼と感謝を表現しています。詩人は、自分の心の深みを表現し、その魂を神へと向けるのです。聖書の他の書は、神が人に語られますが、詩編においては、人が神に語りかけるのです。しかし、それは神への応答であり、詩人の言葉を通して、私たちがそこに聴くものは、神ご自身であり、神の言葉なのです。

箴　言　ペルシャ時代の後、ギリシャの勢力が盛んになる頃から、その影響のもとで編集された格言集です。「生活の智恵」的なものが集められていますが、その根本に神への信仰があります。

ルターが詩編を愛読したことは知られています。宗教改革の激しい戦いの中で、慰めと力を得ていたのです。ルターは、1512年10月にヴィッテンベルクで学位を得、教授となった初めての講義は、13年8月の「詩編」でした。それは15年冬まで続きました。その中で、14年秋の71編の講義ノートが、実に自ら努力して獲得する「神の義」の理解から、キリストのゆえに恵みとして神から与えられる「神の義」の理解へと決定的に転じる記録となっています。

最後に触れるのはヨブ記です。ヨブ記は成立時期、著者等謎の書です。そこには、「神は苦しむ者をその苦しみによって救う」という末尾の言葉が示すように、人間の苦難と信仰の問題が、ヨブという主人公と3人の友人との対話、論争を通して描かれています。多くの人が、世界最高の文学と呼んでいることからも分かるように、またユングが、ヨブ記を巡って本を書いているように、これは私たちにとってかけがえの無い書物です。

ヨブ記　苦難の中にあって、なぜ自分をこのような目に合わせられるのかと、神に問うヨブが、神と人との人格的交わりにおいて結論を見いだす信仰的な劇詩。

5．まとめ

旧約聖書は、その成立過程が、そのままイス

ラエル民族の歴史と深く関わっていることを確認しました。預言者の思想の流れも確認しました。また、その中で、信仰に生きた人々が、その人生の中で感じ取った神への思いを表現した文学も見てきて、私たちは旧約聖書が、神の救いのドラマであることに深く心を捉えられたのではないでしょうか。最古の文書が書かれて今日まで3千年の歴史を持つ旧約聖書は、今日も私たちに、いや世界に語り続けています。

それは、イエス・キリストに至る、神の救いの歴史であり、神の救いのドラマなのです。

Ⅲ．救いの歴史のドラマ（新約）
〈メシヤの到来とそれから〉

1．旧約聖書からイエスへ

1）メシヤ待望

これまで見てきたように、ダニエル書で旧約聖書は閉じられました。そして、この時代エルサレムはローマによって陥落し、支配されました。前166年にマカベヤが出現し、一応イスラエルの独立が達成されたものの、前100年頃ヤンナイオスと内乱が起こり、ついに前63年にローマが調停を口実にエルサレムを占領し、イスラエルはローマの支配のもとに置かれたのです。イエスの時代は、まさにこうした状況が続きました。当時、政治的な支配を握ったのは、あのヘロデでした。ヘロデはローマに取り入り、権勢を誇り、人々に対して圧政で臨みました。そうした中で、終末の待望は人々の信仰の中心となっていきました。彼らは、最後の審判とメシヤ・救い主の到来をひたすら待ち望んでいました。

この時代に至るユダヤ教の中では「この時代」と「来るべき時代」という２つの時代観念が生まれ、それに伴ってメシヤは「来るべき時代の救済者なる王」を意味するようになりました。つまり、強力な王としての政治的メシヤが期待されており、そのメシヤはダビデの子孫から生まれ、エルサレムを破壊した諸国の勢力を排除し、イスラエルに栄光をもたらすために来るとされていました。少し専門的になりますが、当時のこのメシヤ観は、旧約の偽典の一つ「ソロモンの詩編」の中の17:23以下のメシヤ像と一致しています。この文書は当時のメシヤ観

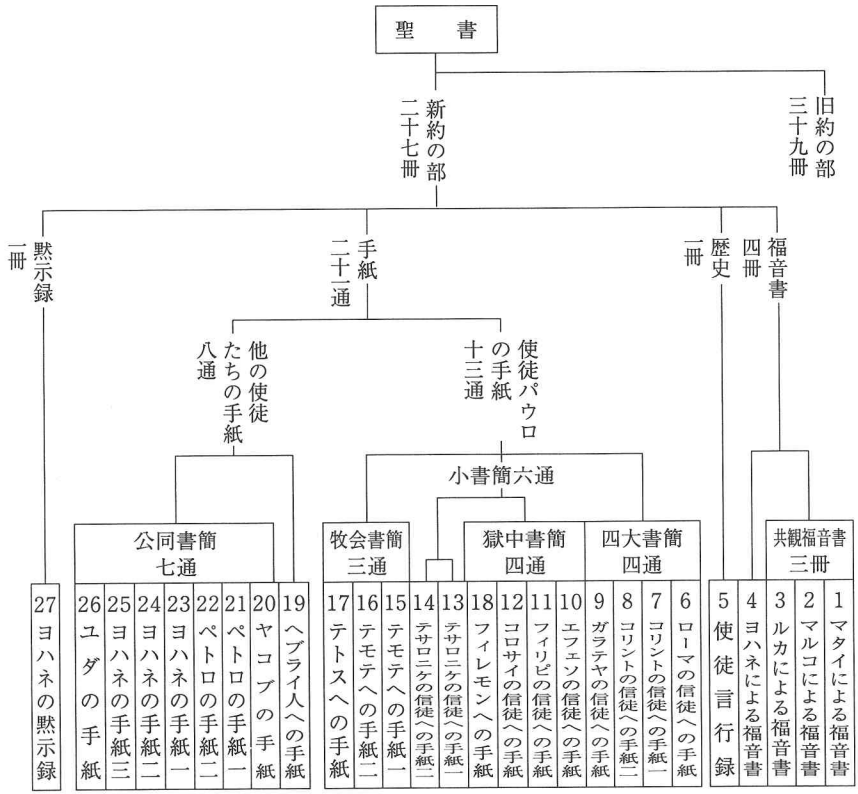
に大きな影響を及ぼしていたものです。主イエスにそれを期待している人々の様子は、福音書の中にも多く出ています。

マルコ8:27、平行他

2）メシヤの出現・キリスト誕生

福音書によると、イエスはヘロデ王の時、ベツレヘムの家畜小屋で生まれたと記されています。しかし、歴史的にはヘロデは前4年に死んでおり、今日では多くの学者がイエスの誕生を前6年か7年ではないかと考えているようです。イエスの誕生日をクリスマスと呼ぶことは周知の通りですが、キリスト教会がクリスマスを祝うようになったのは4世紀頃からです。福音書の中で最も古いマルコには、イエスの誕生の記事がまったく記されていなくて、紀元80年代に成立したといわれるマタイやルカが主イエスの誕生物語を記しているのは、初代教会の初めは、特に主イエスの十字架と復活の出来事を強く受け止めていたからでしょう。なぜなら、この十字架と復活こそがキリスト教信仰の発端となり、その使信が教会の礼拝の中心となっていたからです。しかし、時が下るに従って、十字架と復活信仰の影に置かれていた主イエスの誕生の重みが教会内で増していったためです。

主イエスの誕生に関してマタイやルカ福音書を通して私たちが知ることは、主イエスがダビデの子孫であるということと、その誕生の背後に決定的に働いているのは、神の意思、力だということです。それは、母マリアが主イエスを聖霊によって身ごもったという記述が示しています。マリアは、この事実を神への全き従順によって、肯定し受け入れました。主イエスが聖霊によって生まれたということは、主イエスの



存在を空虚なものにしてしまうのでしょうか。それは、キリストの本質を知るなら、矛盾どころか確かなこととして受け止めることができるのです。キリストの本質は愛です。その愛とはアガペー（神の絶対的な、無償の愛）です。アガペーなるお方が、エロース（人間的な、良いものを求める愛）によって生まれることこそ矛盾なのです。そこから主イエスの生涯のすべてが始まっているのです。

3）イエスと新約聖書

イエスは神の国の福音を説き、人々に生きる

勇気と希望を与えました。その頂点が十字架と復活です。イエス・キリストの出来事に触れて、新しい信仰に目覚めた弟子たちは、イエスこそ旧約で約束されたメシヤ・救い主＝キリストであることを信じて主と仰ぎ、その信仰を伝えました。新約聖書は、そのイエスの宣教と、弟子たちの信仰と宣教の記録です。私たちが留意しておかなければならないのは、聖書は、ナザレのイエスという一人の過去の人物の記録ではなく、復活し今も生きて彼らに臨む主、福音の記録、救いの出来事の証言なのであって、まさに信仰の書であるということです。

4）新約聖書

その新約聖書は27の文書で成り立ち、それらの文書はいずれも紀元50年代（イエスの十字架と復活の20年後）から約100年の間に書かれたものです。新約聖書は、福音書、使徒言行録、手紙、黙示録の４つのグループに分けることができます。

①福音書

共観福音書　マタイによる福音書
　　マルコによる福音書
　　ルカによる福音書
第四福音書　ヨハネによる福音

②使徒言行録

（初代教会の歴史、ルカによる福音書の続編）

③手紙　パウロの手紙（パウロが著者だとされているものを含む）

４大書簡　ローマの信徒への手紙
　　コリントの信徒への手紙一
　　コリントの信徒への手紙二

鉄道唱歌で覚えよう
新約聖書27巻

三　マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ
使徒・ロマ・コリント・ガラテヤ書
エペソ・ピリ・コロ・テサロニケ
テモ・テト・ピレモン・ヘブルの書
四　ヤコブ・ペテロ前後書
ヨハネ三巻・ユダ・黙示
旧新両約合わせれば
聖書の数は六十六

	ガラテヤの信徒への手紙
獄中書簡	エフェソの信徒への手紙
	フィリピの信徒への手紙
	コロサイの信徒への手紙
	フィレモンへの手紙
その他の	テサロニケの信徒への手紙一
手紙	テサロニケの信徒への手紙二
牧会書簡	テモテへの手紙一
	テモテへの手紙二
	テトスへの手紙
著者不明の書簡	ヘブライ人への手紙
公同書簡	ヤコブの手紙
	ペトロの手紙一
	ペトロの手紙二
	ヨハネの手紙一
	ヨハネの手紙二
	ヨハネの手紙三
	ユダの手紙
④黙示録	ヨハネの黙示録

5）福音書

福音書は、キリストであるイエスの出来事を直接伝える書で、私たちが最も大切にし、親しんでいるものです。福音というギリシア語ユアンゲリオンは、ユウ（良い）とアンゲリア（知らせ）という語でできています。元来は「戦場からの勝利の知らせ」を指していました。

では何をもって、聖書は良い知らせというのでしょうか。聖書の中でこの語が用いられるとき、それは主イエスが宣べ伝えた神の国の到来を意味しています。そして、福音書に記されているイエスの宣教のすべてを一言で言うと「神の国の到来を告げる」という一つの文に要約さ

マルコ15:1

れるのです。この神の国という語は、旧約のヘブル語でも、イエスの時代の人々が使っていたアラム語でも、また新約聖書のギリシア語でも「神の支配」という意味です。国家という意味ではなく、神の力の及ぶところという意味です。それは、「神の救いの働き・愛」と捉えることができます。福音書にはそれぞれ書き方に特徴がありますが、その目的は一つです。

「これらのことが書かれたのはあなたがたがイエスは神の子メシヤだと信じるためであり、また信じてイエスの名により命を受けるためである。」この言葉がそれを言い尽くしています。

ヨハネ20:31

福音書に記された主イエスの人格と言葉は、十字架と復活の出来事を経て、今も教会の宣教を通して、人間に、世界に働きかけているのです。

6）共観福音書と第四福音書とその資料

福音書は4つありますが、最初の3つ（マタイ、マルコ、ルカ）は、その記事の内容、構成、用語文体からも、共通の観点から書かれているとして、共観福音書と呼ばれています。またヨハネによる福音書は、ヘレニズム社会が対象とされていて、独自の書き方になっています。共観福音書とは記述の仕方や神学的立場の違い、また共観福音書にはない資料を用いていることから「第四福音書」と呼ばれています。

5世紀の神学者アウグスチヌスは、最初に書かれたのはマタイで、その短縮されたものがマルコだと言い、長くそう信じられてきました。しかし、18世紀に研究が飛躍的に進み、マルコによる福音書が一番早く書かれたことが判りました。

〈新約聖書（27巻）〉
1．福音書　イエス・キリストの出来事を伝える書として、四つの福音書があります。それぞれ著者と伝えられる人の名を冠して呼ばれています。**マタイ**は使徒のひとり、**マルコ**はエルサレムの若い弟子で、パウロやペトロの協力者でした。**ルカ**はパウロの同労者であった医師であり、**ヨハネ**は主に愛された弟子とされます。しかし現在の福音書は、それぞれ幾つかの資料をもととして書かれており、その書かれた年代も、聖書に並べられた順序と一致はしません。それぞれに特徴があり、用語も違うところがありますが、同じ主を指し示しています。イエスの歴史的な伝記というのではなくて、信仰の目で見た主のおとずれの出来事を喜ばしい音信＝福音として伝えています。

そして、マタイとルカが、マルコをその資料として用いたことも判りました。また、マタイとルカには、マルコが知らない別の資料が共通してあったのではないかと考えられています。しかし、その資料は現在のところ確認されていないので、ドイツ語の「資料」を意味するQuelleの頭文字から、仮称Q資料と呼ばれています。更に、マタイもルカも、自分だけの独自資料も用いているようです。Qは紀元50年頃のもので、イエスの教えが中心で、終末的な色彩が強いと言えます。マタイ独自の資料は65年頃のもので、物語とイエスの教えが中心です。ルカのものも同様ですが、60年頃の資料だと言われています。

ヨハネ福音書は、他の福音書とは著しく異なっています。例えば、主イエスの宣教活動はガリラヤが中心ですが、ヨハネではユダヤ地方がその中心です。ヨハネの資料で特徴的なのは、イエスの行った奇跡物語を集めた「しるしの資料」です。あの「７つのしるし」がそうです。いずれにしても、福音書はそれらの資料を基に書かれているのです。

さて、ここでは福音書だけを見ておきます。そして、そこに証されたイエスの宣教そのものに話を戻して、手紙、黙示録は後で学ぶことにしましょう。

2．救いの到来

1）神の国の担い手

先に、福音書に記されているイエスの宣教のすべてを一言で言うと「神の国の到来を告げる」という一つの文に要約されると述べましたが、福音書には、イエスが罪人と交わり食事を共にしたという記事がたびたび出てきます。罪

人というのは律法の違反者のみならず、当時の律法学者やファリサイ人から「アム・ハ・アレツ」地の民と呼ばれていた人々、律法に無関心な者、神殿での祭儀や会堂での礼拝を守らない者、また軽蔑されていた職業に就いている者、病気の者（特に不治の病にある者）、また、徴税人や娼婦、羊飼いなどの人々でした。彼らは、いずれも救いから外れた者とみなされていたのです。

しかし、主イエスは彼らと共におられ、交わり、食事もしました。食事をするというのは、主人がパンを裂く前に唱える神への感謝に与かる宗教的行為でした。「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と非難される理由がここにあったのです。疎外され搾取され差別されている人々がイエスによって招かれ、神の国の担い手になったのです。彼らは悔い改め、イエスに従い、神を信じることによって福音の担い手となったのです。

マルコ2:16

ここで重要なのは、彼らが神の国の担い手になったのは、悔い改めて、イエスから罪の赦しを受けているということなのです。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」まさに、このように主イエスにとって神の国は、人間に罪の赦しを与え、真の救いを与えるものだったのです。主イエスは、そのために神より人間に遣わされ、言葉と力ある業をもって神の国の到来を示し、最後にそれを実現するという使命を持っていたのです。それは「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのである。」という言葉に示されているように、人間の罪を負って自らの命を十

マルコ1:14、マタイ4:12-17
ルカ4:14-15

マルコ10:45

字架に捧げるためであったのです。

2）イエスの死の意味・キリストの死

イエスが十字架で処刑されて死んだということは歴史的事実です。イエスが極刑を前提にしてピラトによって裁かれたことは、歴史の古い文書が実証しています。しかし、その歴史的な事実だけをとらえてイエスの十字架の死の意味を理解することはできません。それでは聖書が語ろうとするイエスの死の意味は理解できません。確かに、イエスの死は、権力という大きな力の狭間で翻弄された革命家の死のようにも、理想主義者の死のようにも、詩人の死のようにも、ジャーナリストの死のようにも見えます。

しかし、イエスの死はキリストの死、神の子の死なのです。当時のメシヤ待望については既に述べました。イエスの死は、イエスに期待していたイスラエルの人々を政治的に絶望させました。なぜなら、彼らにとって、メシヤは死んではならないからです。死んだらメシヤではないのです。ですから、イエスの死を見て、彼らは十字架の傍らを通り過ぎ、依然としてメシヤを捜し求めなければならなかったのです。つまり、イエスの死への理解の相違が、ユダヤ教とキリスト教の違いを作り出したと言えるのです。彼らは、イエスの死に新約聖書が示しているような意味を見出すことは無かったのです。

弟子たちの理解も、この時点では不十分でした。ただイエスご自身だけがその死の意味を、ご自分の死の意味を知っておられたのです。なぜなら、主ご自身が神の子、キリストだったからです。キリストは死を前提としたメシヤなのです。

3）十字架と復活・救いのドラマのクライマックス

ですから、新約聖書はイエスの十字架を単なる悲劇とは捉えません。そうではなく、一見悲劇のように見えるその十字架の死の出来事に神の救いそのものがあったと聖書は信じるのです。聖書は、十字架で全てが終わったのではないことを力強く証言するのです。そして聖書は、その十字架の死の意味を、復活の光によって照らし出すのです。イエスの復活については異議を唱える者が後を絶つことはありません。

しかし、聖書はあふれるばかりの自信をもって、イエス・キリストの復活を証言しています。復活は、十字架の死が神の愛の勝利であることを宣言するのです。イエス・キリストが死に勝利したことによって神と共に生きる命、永遠の命を私たちのものとしてくださるのです。これが、イエス・キリストの出来事の中心なのです。十字架と復活によって、罪と死の力が砕かれ、人間はイエス・キリストを信じることによって、神の国を受け継ぐのです。だからパウロは言うのです。「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。私たちの主イエス・キリストによって私たちに勝利を賜る神に感謝しよう。」

Ｉコリ15:56-57

ここに、神の救いのドラマはクライマックスを迎えるのです。

4）福音書と使徒言行録
復活と弟子たち・第二の召命

イエスの死を目の当たりにした弟子たちは、失意と虚無の中に投げ込まれました。彼らは間違いなく挫折したのです。ヨハネ福音書は、彼らがばらばらにガリラヤに帰っていったことを

記します。まるで流れ解散のようです。イエスの死は間違いなく、弟子たちとイエスの間だけでなく、弟子たち同士の絆も断ち切ってしまったのです。

2．使徒言行録　主の復活の後、初代教会がどのように形成され、発展して行ったかを、ルカがペトロとパウロの働きを軸として述べています。

しかし、使徒言行録によれば、彼らは今エルサレムにいるのです。ひとたびは四散した弟子たちが、再びエルサレムに今集まっているとしたら、彼らをそこに集めたものは何であったのでしょうか。別の言葉で言えば「召命」ということです。彼らは3年前にイエスと出会いました。ペトロの召命を思い起こすまでもなく、彼らは皆、職業も、家族も、全てを捨ててイエスに従ったのです。これが彼らにとって「第一の召命」であったとしたら、今問題にしているのは「第二の」というべき「召命」のことです。

何が彼らを再びそこに集めたのでしょうか。彼らは、イエスの墓が空であったことも、主の復活を告げる御使いの告知も聞きました。しかし、イエスの復活をすぐに信じることはできませんでした。

主は、たびたびご自身を彼らに現されました。つまり、弟子たちが主の復活を信じるまでには、長い時間が必要だったのです。ルカは、主が40日の間彼らにご自身を現されたと記します。そして、この顕現が再び彼らを一つの共同体に結び、彼らは再出発させられることになるのです。つまり、彼らはここに「第二の召命」を受けたと言えるのです。

では、この「第一の召命」と「第二の召命」の間には、どのような内的発展があったのでしょうか。

全てを捨ててイエスの召しに即座に従った「第一の召命」は、イエスという人格に彼らが

全てを奉げたと言うことができます。そこには、彼ら自身の応答、決意があったのです。しかし、その人間的意気込み、決意は、十字架の前で粉々にさせられてしまうのです。その後、彼らを支配したのは、挫折、虚無でした。しかし、その深い挫折、虚無の中から「第二の召命」が起こったのです。それは何によって起こったのか、何を契機にして起こったのか。

「復活」です。復活、それは全く人間的な意気込みや、決意を超えたところからもたらされる、ただ復活の主に根拠を置く召命であることがわかるのです。3度イエスを知らないと言ったペトロをはじめ、十字架の前で、自分の弱さを嫌というほど思い知らされた弟子たちは、今、復活の主の赦しのまなざし、愛のまなざしの中に、自分の罪、自分の存在の全てが復活の主イエスによって担われていることを、彼らは今、真実に知るのです。

使徒言行録は、福音書を書いたルカの手によるものです。使徒言行録がルカ福音書の第二巻だとするなら、それは福音書が第一の召命のドラマ、そして使徒言行録は第二の召命のドラマなのです。

3．教会の誕生と展開

1）昇天　新しい出発

ルカ24:50-53、使徒1:6-11

ルカ福音書と使徒言行録を結んでいるのは、主イエスの昇天の記事です。では、昇天とは何か、それは新しい「時」の始まりです。

復活のキリストは、弟子たちに新しい視野を与えたのです。主イエスが天に昇って行かれるのを見送りながら、弟子たちは新しい時の始まりを実感するのです。それは「中間時」と呼ばれるものです。中間時とは、キリストの昇天と

再臨の間の「時」ということです（旧約の歴史のところで学んだ「中間時代」とは別の事）。それは、神の救いのドラマの新しい段階の始まり、「聖霊の時」「教会の時」です。では「聖霊の時」「教会の時」とは何なのでしょうか。それは、私たちが信仰によって歴史を生きていくということです。キリストの昇天を見送りながら「天を見つめていた」弟子たちは、この時から、逆に視線をこの世界に向け、この地上をいかに生きるかを、これから受け止めて行かなければならなかったのです。

3．パウロの手紙　使徒言行録にも記されるように、パウロは教会の迫害者からキリストの使徒へと変えられ、教会の働きに重要な役割を果たしました。その働きの中で記した手紙は、主イエスによる救いを証しし、新約聖書の中で最も古い文書に属しています。

ローマの信徒への手紙
パウロが紀元56年ごろコリント滞在中に、ローマの信徒にあてて書いた手紙で、彼はローマを訪問することを希望して、あらかじめ自分の信仰内容を順序だてて述べています。そのため、信仰と信仰による生活の基本的な問題が明らかにされています。

コリントの信徒への手紙一、二　ギリシャ南部の国際商港都市コリントに、パウロは1年半ほど留まって伝道しましたが、その後教会の中で信仰上、また道徳上のさまざまな問題が生じました。そのような問題の解決のために記したパウロの手紙。

2）聖霊の降臨と教会の出発

復活のキリストによって「第二の召命」を受けた弟子たちは、もはや絶望の中にいたのではありません。しかし、このとき弟子たちは、次の一歩をどう踏み出したらよいのか、分かっていたわけではありませんでした。そこで彼らは、ひとつ所に集まり祈っていました。そのとき、思いを絶する出来事が起こったことを使徒言行録2章は記します。聖霊降臨の出来事です。ここに起ったことを説明することも、今、再構成することも不可能です。ただ、イエスご自身のこの言葉を聴くことはできるのです。「あなた方の上に聖霊が降ると、あなた方は力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまでわたしの証人となる（使徒1:8）」。

この言葉の通り、ペトロは立ち上がって、キリストの十字架と復活の出来事をエルサレムの人々に力強く語り出すのです。

ここで注目したいのは、聖霊降臨の出来事が「言葉」と深く結びついていることです。聖霊

ガラテヤの信徒への手紙
ガラテヤは、パウロが最初の伝道旅行で教会を建設した地方です。パウロが去った後、ユダヤ主義的な教えが入って来て、信仰があいまいにされました。それに対してパウロが戦闘的な福音の主張と、教会に対する愛を込めて書いた手紙。

エフェソの信徒への手紙
小アジアのエフェソを中心とする地方の教会に、パウロが獄中から送った手紙。

フィリピの信徒への手紙
獄中のパウロに教会からの贈り物をたずさえて来たエパフロディトを、フィリピに帰すにあたって記した感謝の手紙。

コロサイの信徒への手紙
パウロが獄中から小アジアの教会に書き送った回状。誤った教えに対抗して、正しいキリスト信仰に立つことを求めています。

降臨を経た途端、弟子たちが、何か不思議な超人的な能力を得たのではありません。彼らは、神の言葉を獲得したのです。ここで言う「言葉」とは、単なる言語のことではありません。神の言葉を語る力、神の救いを証する力を与えられたのです。いや、神の言葉そのものを与えられたのです。そして、彼らは、新しく与えられた「神の言葉」を語るために、福音、キリストの救いを証するために、それこそ言語の壁を越え、民族の壁を越えて、復活のキリストによって派遣されて行くのです。このことこそ、聖霊降臨の出来事の内容であり、そして、そこに教会の始まり、出発があるのです。

3）宣教の展開・復活のイエスとパウロ

福音は、ペトロそしてペトロの説教を聞いてエルサレムの教会に加わった新しい力、ステファノ、そして、復活のキリストによって異邦人伝道へと召されたパウロによって飛躍的な展開がなされました。

パウロは3回の伝道旅行（第一回　47年　使徒13～15章。第二回　50～52年　マケドニア、ギリシア・コリント滞在　同16～17章。第三回52年エペソ滞在、マケドニアよりエルサレムへ同19:8、20章）によって、ローマ帝国の主要な都市に福音を伝えると共に、そこに成立していった諸教会に、精力的に手紙（書簡）を送り、信仰のありようを明らかにしています。新約聖書には、パウロのものとされる手紙が13通ありますが、中でも4大書簡と呼ばれるローマの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙一、コリントの信徒への手紙二、ガラテヤの信徒への手紙は、とても重要です。

テサロニケの信徒への手紙一、二　マケドニアの首都テサロニケに伝道した後の状況を知って、喜びと感謝のうちにパウロが書いた手紙。主の来臨について述べられています。第一の手紙は紀元50年頃書かれ、新約聖書の中で最も古い文書です。

テモテへの手紙一、二　エフェソ教会の指導者であり、パウロの弟子であったテモテへ、その職務のための手引きと偽りの教師に対する警告を記した手紙。テトスへの手紙と共に牧会書簡ともよばれ、パウロより後の時代の事情をも反映しています。

テトスへの手紙　教会の指導者及び会衆が、偽りの教えに惑わされず、正しい信仰の生活を保つように、警告と戒めを書いた手紙。

フィレモンへの手紙　フィレモンのもとから逃亡した奴隷オネシモのために、パウロがフィレモンに送った執り成しの手紙。

パウロの宣教活動は30年にも及びますが、彼ほど教会の信仰に大きな影響を与えた人はいませんし、彼ほど福音の真理のために戦った人は、ルター以外にいません。ルターの思想の根底には、パウロの福音の真理を受け継ぎ、ルター自身が受け取ろうとした聖書の示す信仰があります。中でもルターは、ガラテヤの信徒への手紙を愛し、その講解の中で、それを「わが妻」とよんでいるほどです。またルターが、ローマ書の中のパウロの言葉に、「信仰による義」という福音の真理を再発見したことは周知のことです。

ここでは、言行録とパウロの手紙を見ながら、彼の生涯と信仰に触れてみましょう。パウロは、あのイスラエルの最初の王と同じサウロという名を持つユダヤ人でした（使徒9:11、22:3）。彼は自らを「ローマ帝国の市民権を持つ者」（使徒22:25）と言います。パウロ自身の自己紹介の言葉によると「わたしは、キリキヤ州のタルソスで生まれたユダヤ人です。そしてこの都で育ち、ガマリエルのもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、今日の皆さんと同じように、熱心に神に仕えていました」（使徒22:3）とあります。

更に、「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした」（フィリピ3:5、6）とあるように、最初は、キリスト教徒をユダヤ教の異端として、強烈に迫害していました（使徒7:54～8:1）。しかし、パウロは後に「わたしの

4．ヘブライ人への手紙
パウロの手紙と考えられたこともありますが書いた人は明らかではありません。旧約聖書との関連で、イエス・キリストが救い主であることを説いています。

主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、これらを塵あくたと見なしています」（フィリピ3:8）と述べています。

文字通り180度の転換、悔い改めがパウロの身に起こりました。それは、ここでも復活のキリストとの出会い、いや、キリストご自身の赦しがその根底にあります（使徒9:1〜パウロの回心、32年頃）。パウロは言います、「わたしはその罪人の中で最たるものです」（Ｉテモテ1:15）。復活の主は生きて働き、今も神の救いをもって、近づき、共に歩み、罪の赦しを与えてくださるのです。パウロは「死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座って、わたしたちのために執り成してくださるからです」（ローマ8:34）と言います。

ですから、私たちはこのキリストによって神と結ばれ、「信仰と、希望と、愛」（Ｉコリ13:13）の内に生きることができるのです。

4．終末の希望と救いの完成・黙示録

5．公同書簡　次の七つの手紙は、多くの教会にあてて書かれたものとして、公同書簡と古くからよばれてきました。その成立は1世紀の終わりから2世紀前半になると考えられています。

パウロは、今コリントの信徒への手紙一で「それゆえ、信仰と、希望と、愛この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」と言いました。

復活のキリストによって神との新しい関係に入れられたキリスト者は、この愛において生き、終末の日を希望・待望しているのだと言えます。そして、私たちの希望は信仰によって、支えられているのです。この信仰を「終末の希望」と言います。

私たちの信仰は「今おられ、かつておられ、

ヤコブの手紙　ユダヤ的伝統を重んじる発信者ヤコブによる一般の教会のための教訓と勧告の手紙。

ペトロの手紙一.　迫害の恐怖にさらされていた小アジアの教会に、生ける望みをキリストにおいて持つように勧めた手紙。

ペトロの手紙二.　誤った教えに対して警戒し、神の約束に信頼して真の信仰に生きるように勧めています。

ヨハネの手紙一、二、三、誤った教えを警戒し、忠実な信仰に生きるように勧め、信仰と愛を強調しています。古くから使徒ヨハネの手紙といわれてきましたが、二，三は恐らくヨハネとよばれた長老の手紙と考えられます。

やがて来られる方」、「アルファであり、オメガである方」（黙示1:8）であるキリストの、終わりの日に再び来られるという約束なしにはありえません。「マラナ・タ（主よ、来てください）」（Ｉコリント16:22）は、初代のキリストを信じる者の祈りであって、互いに交わしていた日常の挨拶であったと言われています。つまり、キリストを信じる者は、喜びをもって終末の時を待ち望む存在なのです。終末への希望によって、現在の生活の中で、神と人への誠実を貫こうとするのです。キリストの再臨と神の国の完成がいつ起ってもよいように備えて生きるのです（マタイ25:1-13十人の乙女のたとえ）。

このような生き方を終末的な生き方と言います。しかし、それは個人だけでのことではありません。なぜなら、キリスト教信仰では、救いは個人の救いで完結するのではないからです。私たちは、真の意味での共同体をその中で目指すのです。人間は、一人では生きていくことはできません。愛と信頼による交わりの中で生きるものなのです。そのような共同体は、人間の力で作り上げられるのではなく、命と愛の源である神ご自身によって完成にいたるものなのです。終末によって到来する神の国の完成によって実現されるものなのです。

神との関係の回復は人間同士の関係の回復をもたらします。人間の世界、この世（アイオーン）は変遷を続けて行きます。しかし、この共同体、即ち教会とキリストを信じる者は、歴史の開始を見据え、そしてこの中間時を、終わりを知る者として動かされること無く生きていくのです。「実に神の国はあなたがたの間にあるのだ。」（ルカ17:21）

ユダの手紙　ヤコブの兄弟ユダの手紙とされます。内容的にはペトロの手紙二と共通し、戒めと勧告を記しています。

6．ヨハネの黙示録　旧約のダニエル書などと同じく「黙示文学」とよばれる文体で、幻や象徴で使信を伝えています。とくにキリストの来臨による終末の勝利が告げられます。1世紀の終わりか2世紀の初め頃、迫害の中にあったキリスト者たちを励ますために書かれました。

私たちキリスト者は、この世の歴史の未来における神の国の完成を待ち望むという視座を明確に持ちつつ、神の国は「キリストの愛のもとにある」という「すでに」と「いまだ」の緊張関係の中で生きていくのです。

「以上、すべてを証しする方が言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者と共にあるように。」（黙示22:20-21）これは、黙示録の最後の言葉、いや、聖書の最後の言葉です。

＜旧約聖書（39巻）＞	
1.五　書	モーセによって書かれたと伝えられましたが、むしろモーセを中心とする一連の書といえます。「律法」ともよばれていますが、創世記や族長の物語、イスラエルの古い歴史を含んでいて、単なる律法集ではありません。それらの物語を通して、神のみ前に歩む道が示されています。
創世記	天地の創造から人の堕落、ノアの洪水、バベルの塔の物語に続いて、アブラハムを初めとする族長たちの物語が含まれ、イスラエルが神の約束の地に至りながら、エジプトに住むようになった次第が語られています。
出エジプト記	モーセが神の召しを受け、イスラエルの民を率いてエジプトから脱出し、シナイ山で神の契約と「十戒」を受けたこと、それと共に当時のイスラエルに与えられた多くの戒めがしるされています。
レビ記	レビ族はイスラエルの中で祭司の役割を果たした部族です。この書は彼らの役目であった礼拝と祭司職に関する細かな規定がしるされています。
民数記	出エジプトの後、荒れ野を旅するイスラエルの民の人口調査が記されていることから、民数記の名があります。荒れ野での出来事と、いろいろな律法がしるされています。
申命記	「申命」は神の戒めを繰り返して述べるというほどの意味です。荒れ野の旅を導いたモーセが約束の地を眺めつつこの世を去る前に残した決別の説教の形で、たくさんの律法がまとめられています。
2.歴史書	モーセなきあと、ヨシュアによって導かれたイスラエルの民が、約束の地カナンに入りますが、その歴史が進展すると共に、信仰的には次第に下降線をたどります。ついにはイスラエル民族が建設した王国は滅ぼされ、アッシリア、ついでバビロニアの捕虜となります。その中で信仰的集団としてのイスラエルの団結が目指され、結果的には救い主への備えがなされます。その歴史が12の書物になっていますが、その中でルツ記とエステル記は歴史的な「物語」と見られます。
ヨシュア記	ヨシュアを指導者とするイスラエルの民が、40年の荒れ野の旅を終えてカナンに侵入し、その地を割り振って住み着くようになる次第と、ヨシュアの民に対する勧めが記されます。

士師記	ヨシュアの後、信仰あつい12人の士師（さばき人）たちが、次々にイスラエルの指導者の役目を果たしてゆく時代の出来事の記事です。
ルツ記	士師時代を舞台とする女性ルツの短い信仰的物語。
サムエル記上下	士師の時代が終わって、イスラエルが王国として形を整える事情が描かれます。サウルに続いてダビデが王となり、国を盛んにしますが、ダビデの個人生活は信仰的であると同時に、家庭的に弱点をもっていて、問題の種となります。
列王記上下・歴代誌上下	ダビデの後継者ソロモンによって、イスラエルは繁栄を極めますが、それも長続きせず、やがてイスラエルとユダの南北二王国に分かれて争い、さらにいずれも外敵アッシリアとバビロニアのために滅亡するまでのことが記されています。エリヤ、エリシャ、イザヤらの預言者の活躍、ヨシア王の宗教改革の出来事もこの時期のことです。ペルシャ王キュロスはバビロニアを滅ぼし、バビロニアに捕囚となっていたイスラエルの民は故国に帰ることを許されます。
エズラ記・ネヘミヤ記	捕囚の民が故国に帰還する次第と、神殿を再興してエルサレムをもう一度聖なる都とするための処置とざんげが書かれています。エズラ記ネヘミヤ記に書かれた出来事の後、ネヘミヤがエルサレムに石垣を築き、エズラが神殿のために新しい規定と律法を公布したことが記されます。
エステル記	ペルシャにいた離散のユダヤ人の危機を、一人の女性が救った物語。ルツ記と共に、一連の歴史とは少し異なる物語で、共に女性を主人公としています。捕囚から帰還したのちの時代が背景になっています。
3.詩　歌	ヘブル語聖書で「諸書」の中に入れられている詩や格言集などで、イスラエルの信仰の具体的な生活への反映でもあります。
ヨブ記	苦難の中にあって、なぜ自分をこのような目に合わせられるのかと、神に問うヨブが、神と人との人格的交わりにおいて結論を見いだす信仰的な劇詩。
詩　編	神殿における讃美歌、個人的な嘆きや願い、感謝の歌など、イスラエルの民の信仰の詩集です。「律法」がモーセに帰せられているように、詩の多くがダビデのものとされています。
箴　言	ペルシャ時代の後、ギリシャの勢力が盛んになる頃から、その影響のもとで編集された格言集です。「生活の智恵」的なもの

	が集められていますが、その根本に神への信仰があります。
コヘレトの言葉	箴言などと共に、智恵文学とよばれる部類に属します。実生活に対する無常観や懐疑が吐露されて、伝統的な信仰を問いなおそうとしていますが、基本には神への信頼があります。「コヘレト」は集会の招集者あるいは集会の中で語る者を意味し、以前は「伝道の書」と呼ばれていました。
雅　歌	もともとはコヘレトの言葉と対照的な恋愛の歌。しかし単に恋愛を謳歌するものとしてではなく、神と人との交わりを歌ったものとして受け取られています。
4.預言書	ソロモン王時代に頂点に達したイスラエルの栄華が衰退し、国の独立が失われたころ、本来の神信仰に帰るように説いた預言者たちが現れました。神はそのみことばを彼らに託し、民に悔い改めを説かせ、救いの約束を与えられました。列王記にはエリヤ、エリシャらの活動が記され、ヘブル語聖書ではヨシュア、士師、サムエル、列王が「前の預言者」とよばれています。文書の残っている預言者としてイザヤ、エレミヤ、エゼキエルは、分量的にも内容的にも大預言者とよばれますが、時代的には、アモス、ホセアらの方が彼らより先になります。哀歌とダニエル書は預言書と少し性格が違いますが、ふつうその中に含めて数えられます。
イザヤ書	預言者イザヤは紀元前8世紀に活躍しましたが、イザヤ書はイザヤ一人の筆によるのではなく、40章以下は背景の時代も違うと認められています。神の民に対する叱責と慰め、ことに40章以下は主のしもべによる解放と救いの希望が告げられています。
エレミヤ書	エレミヤは紀元前7世紀に、南王朝滅亡の危機に際して、神への信頼と服従を語りました。深い個人的な信仰を表しています。
哀　歌	滅ぼされたエルサレムの廃墟での悲しみの歌。
エゼキエル書	エレミヤの後、バビロニア捕囚時代の預言者エゼキエルの民に対する警告と慰めで、祖国復興の希望を説いています。
ダニエル書	物語と幻の部分からなり、「人の子」のような者がとこしえに支配するためにやってくる希望を語っています。幻を通して神のみわざを語る、いわゆる「黙示文学」の代表的な書です。
ホセア書	紀元前8世紀頃、アモスに少し遅れて北王国に現れた預言者ホ

	セアは、自分の失敗に終わった結婚生活の中から、あるいはそれに重ねて、神の憐れみを預言しました。
ヨエル書	ヨエルは南王国の預言者で、いなごの災害に事寄せて、終末の主の日について語っています。
アモス書	紀元前8世紀の半ばに出た預言者アモスによるもので、預言文書としては最も古いものといわれます。社会の不義不正に対する神の審判を宣告し、神の義を強調しています。
オバデヤ書	旧約聖書中最も短い書で、捕囚期に書かれました。エドム人のおびやかしと、究極的な神による望みを語っています。
ヨナ書	預言者ヨナが、異邦人の町ニネベに悔い改めを説くように遣わされた教訓的な物語で、福音書にもキリストの型を示すものとして引かれています。
ミカ書	紀元前8世紀ホセアからイザヤの時代に活躍したミカによる不義に対する神の叱責と審判、民に対する約束と慰めの預言です。
ナホム書	神の民をしいたげるニネベに対する審判と、神に信頼する民へ復興のよいおとずれが告げられます。紀元前7世紀半ばのこととされています。
ハバクク書	紀元前7世紀末から6世紀にかけての時代に、神の民の罪に対して、神がカルデヤ人を起こして罰したもうが、やがてそのカルデヤ人もその悪によって罰せられ、神の民に最終的な救いが来ることが約束されています。
ゼファニア書	エレミヤの時代の前に活躍したと思われるゼファニアの書で、主の日が異邦人にとってだけでなく、ユダにとっても、恐るべき災難の日であるけれども、少数の残りの者に救いが約束されることが告げられます。
ハガイ書	捕囚後の紀元前8世紀後半、ユダの復興について預言したハガイの書。
ゼカリヤ書	ハガイの少し後に現れ、神殿復興に力を尽くしたゼカリヤの預言で、柔和なメシアの姿を示しています。
マラキ書	捕囚後の民に、倫理的、宗教的な問題について戒め、主の日の来ることを告げています。
＜新約聖書（27巻）＞	
1.福音書	イエス・キリストの出来事を伝える書として、四つの福音書が

マタイ マルコ ル　カ ヨハネ	あります。それぞれ著者と伝えられる人の名を冠して呼ばれています。**マタイ**は使徒のひとり、**マルコ**はエルサレムの若い弟子で、パウロやペトロの協力者でした。**ルカ**はパウロの同労者であった医師であり、**ヨハネ**は主に愛された弟子とされます。しかし現在の福音書は、それぞれ幾つかの資料をもととして書かれており、その書かれた年代も、聖書に並べられた順序と一致はしません。それぞれに特徴があり、用語も違うところがありますが、同じ主を指し示しています。イエスの歴史的な伝記というのではなくて、信仰の目で見た主のおとずれの出来事を喜ばしい音信＝福音として伝えています。
2.使徒言行録	主の復活の後、初代教会がどのように形成され、発展して行ったかを、ルカがペトロとパウロの働きを軸として述べています。
3.パウロの手紙	使徒言行録にも記されるように、パウロは教会の迫害者からキリストの使徒へと変えられ、教会の働きに重要な役割を果たしました。その働きの中で記した手紙は、主イエスによる救いを証しし、新約聖書の中で最も古い文書に属しています。
ローマの信徒への手紙	パウロが紀元56年ごろコリント滞在中に、ローマの信徒にあてて書いた手紙で、彼はローマを訪問することを希望して、あらかじめ自分の信仰内容を順序だてて述べています。そのため、信仰と信仰による生活の基本的な問題が明らかにされています。
コリントの信徒への手紙一、二	ギリシャ南部の国際商港都市コリントに、パウロは１年半ほど留まって伝道しましたが、その後教会の中で信仰上、また道徳上のさまざまな問題が生じました。そのような問題の解決のために記したパウロの手紙。
ガラテヤの信徒への手紙	ガラテヤは、パウロが最初の伝道旅行で教会を建設した地方です。パウロが去った後、ユダヤ主義的な教えが入って来て、信仰があいまいにされました。それに対してパウロが戦闘的な福音の主張と、教会に対する愛を込めて書いた手紙。
エフェソの信徒への手紙	小アジアのエフェソを中心とする地方の教会に、パウロが獄中から送った手紙。
フィリピの信徒への手紙	獄中のパウロに教会からの贈り物をたずさえて来たエパフロディトを、フィリピに帰すにあたって記した感謝の手紙。
コロサイの信徒	パウロが獄中から小アジアの教会に書き送った回状。誤った教

への手紙	えに対抗して、正しいキリスト信仰に立つことを求めています。
テサロニケの信徒への手紙一、二	マケドニアの首都テサロニケに伝道した後の状況を知って、喜びと感謝のうちにパウロが書いた手紙。主の来臨について述べられています。第一の手紙は紀元50年頃書かれ、新約聖書の中で最も古い文書です。
テモテへの手紙一、二	エフェソ教会の指導者であり、パウロの弟子であったテモテへ、その職務のための手引きと偽りの教師に対する警告を記した手紙。テトスへの手紙と共に牧会書簡ともよばれ、パウロより後の時代の事情をも反映しています。
テトスへの手紙	教会の指導者及び会衆が、偽りの教えに惑わされず、正しい信仰の生活を保つように、警告と戒めを書いた手紙。
フィレモンへの手紙	フィレモンのもとから逃亡した奴隷オネシモのために、パウロがフィレモンに送った執り成しの手紙。
4.ヘブライ人への手紙	パウロの手紙と考えられたこともありますが書いた人は明らかではありません。旧約聖書との関連で、イエス・キリストが救い主であることを説いています。
5.公同書簡	次の七つの手紙は、多くの教会にあてて書かれたものとして、公同書簡と古くからよばれてきました。その成立は１世紀の終わりから２世紀前半になると考えられています。
ヤコブの手紙	ユダヤ的伝統を重んじる発信者ヤコブによる一般の教会のための教訓と勧告の手紙。
ペトロの手紙一	迫害の恐怖にさらされていた小アジアの教会に、生ける望みをキリストにおいて持つように勧めた手紙。
ペトロの手紙二	誤った教えに対して警戒し、神の約束に信頼して真の信仰に生きるように勧めています。
ヨハネの手紙一、二、三	誤った教えを警戒し、忠実な信仰に生きるように勧め、信仰と愛を強調しています。古くから使徒ヨハネの手紙といわれてきましたが、二、三は恐らくヨハネとよばれた長老の手紙と考えられます。
ユダの手紙	ヤコブの兄弟ユダの手紙とされます。内容的にはペトロの手紙二と共通し、戒めと勧告を記しています。
6.ヨハネの黙示録	旧約のダニエル書などと同じく「黙示文学」とよばれる文体で、幻や象徴で使信を伝えています。とくにキリストの再臨に

	よる終末の勝利が告げられます。1世紀の終わりか2世紀の初め頃、迫害の中にあったキリスト者たちを励ますために書かれました。

旧約聖書・新約聖書の内容要約（66－72頁）は
石居正己著「キリスト教信仰へのガイド2～愛と恐れと信頼と～」
を参考にさせていただきました。

太田一彦
1953年生まれ
日本ルーテル神学校卒
仙台教会、三鷹教会、都南教会を歴任
ルーテル学院大学非常勤講師

LAOS講座　第4号　神と人間 ―聖書は救いのドラマー

発行日　2005年3月15日
編集者　PM21　第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会
　委員長　齋藤末理子
著　者　太田一彦
発行者　「日本福音ルーテル教会宣教方策21」（PM21）推進委員会
　宣教室長　推進委員長　徳弘浩隆
発行所　日本福音ルーテル教会　宣教室
　〒162-0842　東京都新宿区市谷砂土原町1-1
　電話：03-3260-1908　FAX：03-3260-1948
　e-mail　mission04@jelc.or.jp
印刷所　精文堂印刷株式会社